

徳島県文化財調査概報

徳島県教育委員会

序 文

本県内には、農業水利事業、道路改良事業等の土木工事が進められています。

この「徳島県文化財調査概報」は、これらの工事等に関連し、昭和54年度に県教育委員会が調査を行い、その結果をまとめたものであります。県内の遺跡やその保存保護に御活用いただければ幸甚であります。

なお、これらの調査に際し、御教示、御協力いただいた関係機関、各位に衷心よりお礼申し上げます。

昭和56年3月31日

徳島県教育委員会

教育長 藤野井 親 仁

目 次

足代遺跡..... 1

ひびき岩古墳群..... 21

庄遺跡..... 55

足 代 遺 跡

小原地区発掘調査

目 次

はじめに

1. 位置と環境	2
2. 周辺の遺跡	3
3. 調査の経過	5
4. 遺 構	6
5. 遺 物	8
6. ま と め	9

はじめに

本報告書は、調査を担当した、松永・小笠原の共著であり、下記にその分担を記す。

1. 写真は遺構は松永、遺物は立花が撮影を行った。
2. 1, 2, 3, 5, 6の項は松永が製図執筆し、4の項は小笠原が製図執筆した。
3. 調査組織

調査総括	立花	博	(県教委文化課文化財保護班長)
調査主任	松永	住美	(県教委文化課研修生)
調査員	結城	孝典	(県教委文化課文化財調査員)
	小笠原	賢	(県教委文化課文化財調査員)
	松永	雅行	(現瀬戸小学校助教諭)

作業協力者(順不同)

谷藤カズ子	片山キミヨ	山下ツネ子	山西光子	山西勝子
大西 滙子	土井富美子	土井キミ子	谷藤ツヤ子	横関 安一
木藤寿美子	小川真知子	山西 照子	土井 武夫	土井 友夫
大西 正澄	大西 安子	三好美代子	林 智恵子	

1. 位置と環境

本遺跡は、徳島県三好郡三好町足代字柳ノ坪及び小原に位置する。この小原地区は、北の阿讃山脈から南流して吉野川に注ぐ馬木谷川と黒川原谷川の間にはさまれた地点にある。主に黒川原谷川の堆積作用によって形成された海拔85mから95mの南西方向にゆるやかな傾斜をもつ台地であり、有史以前の吉野川の侵蝕作用により河岸段丘となっている。本遺跡は、阿讃山脈より二段目の河岸段丘中央にあり、そこから南へ300m下ったところで急に落ち、吉野川となるのである。現在河岸段丘二段目の中央部は、吉野川の洪水の影響もなく水田地帯となっている。南の傾斜をなしているところは桑園となっている。発掘調査の際、小礫層より伏流水がしばしばみられたこと、現在も深さ2m前後で湧水をもつ堀り抜き井戸が数多くみられることから、古くはこの湧水を利用しての農業が営まれていたことがうかがえる。この吉野川の河岸段丘及び瓢状地においては、河岸段丘の二段目の丘陵末端より湧水がみられ、現在でもこの湧水を飲料水や農業用水に利用されているのである。

吉野川の河岸段丘は、相当古くから、人々が生活を始めたときとみえて、三好郡三好町土取遺跡、三好郡三野町勢力からは、河岸段丘の一段目でナイフ形石器が出土しており、三好郡三好町昼間大柿遺跡では縄文時代後期(中津併行期)の土器片が出土している。特に吉野川南岸が、広大な平野、丘陵がなく、しかも日当たりが悪いことからみて、この河岸段丘がこの地域では生活に最も適した場所であったと思われる。

2. 周辺の遺跡（第1図）

三好町内の遺跡については、吉野川北岸農業水利事業による分布調査が行われるまでは、土取遺跡、七夕塚、立法寺跡などが「三好町史」によって知られているが、土取遺跡を除いては発掘調査等がほとんどされていなかった。

以下、吉野川北岸農業水利事業に関連した調査を中心に述べてみたいと思うのである。

(1) 州津遺跡

本遺跡は、吉野川北岸の沖積平野標高85mの徳島県三好郡池田町字州津に位置する。昭和49年2月吉野川北岸農業水利事業工事中に土器片が見つかり、昭和49年6月3日より6月22日にかけて調査を行った。

調査の結果、土器包含層が確認され、周辺の分布調査区より南側の微高地が遺跡の中心であることが判明した。

(2) 東州津遺跡

州津遺跡より東へ1kmほど離れた河岸段丘の先端、標高約80mの三好郡池田町字東州津に位置する。吉野川北岸農業水利事業関連の調査として行われた。正式な報告がなされていない為詳細はわからないが、一辺11mの方形周溝基1ヶ所、溝状遺構1ヶ所、土壌墓群9ヶ所が検出されている。いずれも弥生時代後期の時期とされている。なお焼土土壌が3ヶ所検出されており、時期については、弥生時代後期のものと奈良時代後期の2つの時期のものがあるようである。

(3) 土取遺跡

州津遺跡より北東に1.5km離れた、阿讃山脈の一支脈から東に延びた尾根の先端、標高150mの三好郡三好町星間字土取に位置する。本遺跡は、昭和44年に北川右二氏によって、ナイフ形石器が採集されており、本県では数少ない旧石器時代の遺跡であることが確認されていた。昭和47年6月、町営住宅の建設が行われることになり、住宅建設に先立って昭和47年7月27日より8月15日にかけて調査が行われた。調査の結果、径7m、深さ0.2mの堅穴住居址が検出された。出土した土器からみて、弥生時代中期の時期と判明した。出土遺物として旧石器時代では、ナイフ標石器（ナイフ形石器？）、弥生時代では、石鎌、石槍、石匙、環状石斧、打製石斧などが出土している。報告書によれば、高地性集落としての位置づけがなされている。

(4) 大柿遺跡

土取遺跡より南東約800m離れた阿讃山脈より二段目の河岸段丘中央部、標高81mの三好郡三好町星間字大柿、堂の本、石橋、宮の前に位置する。昭和50年6月より2月にかけて、吉野川北岸農業水利事業関連の調査として行われた。調査の結果、堅穴住居址が弥生時代11ヶ所、古墳時代16ヶ所、時期不明1ヶ所の計28ヶ所、建物遺構は弥生時代4ヶ所、古墳時代7ヶ所の11ヶ所、貯蔵穴はいずれも弥生時代の前期末から後期末にかけてのものが80ヶ所、土壌墓も弥生時代前期末から後期にかけて10ヶ所、溝状遺構は30ヶ所が検出された。出土遺物は膨大な量である為、整理が終わっていないので十分はわからないが、弥生時代前期後半（阿方併行期）から後期（上東併行期）にかけての本県の弥生時代の型式編年が十分とらえられるだけの資料があると思われる。早い時期に本報告書が出されることが望まれる。

(5) 昼間遺跡（京伝地区）

大栢遺跡より東へ約100m離れた洪積台地の阿讃山脈より第一段目の河岸段丘先端、標高85m前後の三好郡三好町昼間字京伝、立法寺、立花に位置する。昭和51年7月15日から8月下旬にかけて、吉野川北岸農業水利事業関連の調査として行われた。調査の結果、一辺4mの隅丸方形の堅穴住居址1ヶ所、建物遺構3ヶ所、土壇18ヶ所、溝1ヶ所、谷川遺構1ヶ所が検出された。遺物としては、弥生式土器（壺・甕）、土師器、須恵器、瓦器、陶磁片、石鏃、石彫丁、石斧などが出土している。出土遺物からみて、古代から中世にかけての期間が考えられる。

(6) 昼間遺跡（天神前地区）

京伝地区より、南東約200m離れた阿讃山脈より二段目の河岸段丘先端にあり、標高84mの三好郡三好町昼間字天神前に位置する。昭和52年5月27日より9月26日にかけて、吉野川北岸農業水利事業に関連して調査が行われた。調査は確認発掘調査区と全面発掘調査区において行った。

調査の結果、溝状遺構1ヶ所が確認された。遺物としては、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石鏃、磨製石斧などが出土した。

(7) 昼間遺跡（正力地区）

天神前地区より、東へ約250m離れた阿讃山脈から南流する喜來谷川と吉野川の堆積作用によって形成された海拔85mの沖積平野上、三好郡三好町昼間字天神東、正力、大片出に位置する。昭和52年11月10日より昭和53年2月10日にかけて、吉野川北岸農業水利事業に関連して調査が行われた。調査の結果、長径約7.5m、短径6.3m、深さ0.5mの楕円形の堅穴住居址1ヶ所、土壇15ヶ所が検出された。時期はいずれも土師器を伴っており古墳時代と判明した。その他に溝状遺構、谷川遺構が検出された。出土遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、黒色土器、瓦器、石鏃、石斧が出土した。又、内行花文鏡を二次加工して装飾品として用いられたと思われる鏡片が出土している。

(8) 昼間遺跡（荒神前地区）

正力地区より南東へ約200m離れた洪積台地上、標高85m前後の三好郡三好町昼間字荒神前に位置する。昭和51年12月24日より昭和52年2月5日にかけて、吉野川北岸農業水利事業に関連して調査を行った。遺構としては、直径10.1m、深さ0.4～0.6mの堅穴住居址1ヶ所、柱穴20ヶ所が検出された。時期は弥生時代後期であることが判明した。

出土遺物は、弥生式土器（壺・甕・高杯）、土師器、須恵器、石鏃、鉄製品（堅穴住居址内）が出土している。

(9) 昼間遺跡（西貝川地区）

荒神前地区より東南東約1.2km離れた阿讃山脈から二段目の河岸段丘二段目の丘陵先端斜面、標高約85mの三好郡三好町昼間字西貝川に位置する。昭和52年5月10日より6月23日にかけて、吉野川北岸農業水利事業に関連して調査が行われた。調査の結果、直径約13mの円形周溝墓が検出された。

周溝墓の溝は、巾0.4～1.2m、深さ0.2～0.6m、礫が堆積したU字溝である。主体部は、長さ2.5m、巾0.8mで円礫によって石室状に配石されていた。丘陵部先端の断面に長さ4.5m、南北1.5mの隅丸長方形の炭化土塊（1号土塊）が検出された。厚さ20cmほどの皿状堆積した炭化層があり、覆土中に磨滅した土師器、須恵器片が出土した。時期は不明。又、1号土塊より北へ5m離れたところで、長さ4.4m、巾1.9mの炭化土塊（2号土塊）が検出された。1号土塊と異なり、上面に配石があり、天

井部がへこんで落ちこんだ状態で検出された。出土遺物は、縄文式土器（後期前半）、弥生式土器、須恵器、石槍、石鏃、石鎌、石鏟が出土している。

00 足代遺跡（円通寺地区）

西貝川地区より、東北東約400m離れた海拔85mの阿讃山脈から二段目の河岸段丘先端上にあり、三好郡三好町足代字円通寺、西内、小山、柳ノ坪に位置する。昭和53年8月5日より11月30日にかけて吉野川北岸水利事業に関連して調査が行われた。

調査の結果、弥生時代中期の径4.2mの堅穴住居址1ヶ所、建物遺構3ヶ所、土壇23ヶ所、焼土遺構（径0.6～0.7m）3ヶ所検出された。出土遺物は、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦器、石鎌、石斧、石彫丁、土鏟などが出土している。

3. 調査の経過

本遺跡は、吉野川北岸農業水利事業に伴う調査であり、工事と併行して、昭和49年より調査を行っている。以下、調査日誌より調査経過の概略を述べる。

- 8月17日 資材運搬、センター杭打ち
- 8月18日 トレンチ設定
- 8月20日 A区第1トレンチよりSK-01を確認
- 8月23日 SK-01完掘、図面、写真撮影、第5トレンチよりSK-02を確認
B区センター杭打ち
- 8月25日 SK-02完掘、図面、写真撮影
- 8月30日 A区調査完了、現場事務所（テント）B区へ移動
- 8月31日 B区第2トレンチ30cm程の所から多量の伏流水（湧水）が出る。
- 9月4日 台風12号接近、テント補強、排水溝を切る。
- 9月8日 B-1～3区全測図作成
- 9月10日 B-1～3区工事者に引き渡す。
- 9月14日 SK-07確認
- 9月20日 SK-07平面図、断面図、写真撮影
- 9月26日 B-11区でSK-03、SK-04確認
- 9月30日 B-4～11区全測図完了
- 10月1日 今秋2度目の台風接近
- 10月3日 SK-03、SK-04土層平面図、断面図、写真撮影
- 10月4日 調査事務所C区へ移動
- 10月6日 C-3区の井戸に転落防止の為防護サクを作る。
- 10月15日 SK-05確認
- 10月18日 今秋3度目の台風接近
- 10月22日 SK-05、平面図、土層図、写真撮影
- 10月23日 SK-04の東半分、SK-06確認及び発掘

- 10月24日 SK-04, SK-05, 平面図, 断面図, 写真撮影
10月25日 C区全景写真
10月26日 資料撤収
10月29日 調査区内後かたづけ, 調査完了

4. 遺 構

今回の調査では、炭化土塊6ヶ所、集石土塊1ヶ所、溝状遺構1ヶ所が検出された。以下各遺構ごとに概略を述べる。

(1) 炭化土塊

○ SK-01 (第3図)

A-第1区において、床土直下(耕土を含めて第3層)で検出された。主軸方向N 85°Wに向き、長さ6.13m、巾1.7m、深さ35cmの隅丸長方形を呈し、西側に長さ0.5mの竈と同様の突出部を伴っている。突出部外側に径約15cmの柱穴、土塊内部の屑に、径8cmの柱穴が検出された。この状態からみると、突出部を柱をたてて覆ったものが考えられる。断面から見ると、焚口部が浅く、突出部に向けて傾斜している。土塊内の土層は、まず第1層は黄灰色土層で下部ほど焼土を多く含んでいる。第2層は黄灰色土層で、第1層と異なり灰を混入している。第3層は黒灰色炭化物層で、粒子の細かい灰を含んでいる。第4層は黒色炭化物層で、かなり大きな炭化材を含んでいる。この土層から見ると、第1層は天井部と思われ、第3層は煙道部にあたるものであると考えられる。床面は赤く非常に堅く焼き固められていた。

○ SK-02 (第3図)

A-5区において、SK-01と同じく、床土直下で検出された。主軸方向N 84°Wに向き、長さ4.3m、巾1.2m、深さ0.3mの楕円形を呈する。SK-01と異なり突出部、柱穴は見られなかった。断面図から見ると、東から西にむかって傾斜しており、第2層灰色炭化物層が煙道部に立ち上がっている。第3層黄色粘質土層は途中で切れており、ちょうど焚口部の閉塞状になっている。第4層黒色炭化物層には、SK-01と同様にかかなり大きな炭化材を含んでいた。

○ SK-03 (第3図)

B-11区及びC-7区にかけて、床土直下、農業用道路により分断され東及び西の部分の一部が検出された。主軸方向N 79°Wに向き、長さ4.1m、巾(推定)1.5m、深さ0.15mで、東西の両方が突出している。屑の部分に、径8~10cmの柱穴を伴っている。断面図から見ると、やはり東から西に傾斜しており、第2層灰色土層、第3層黒色炭化物層が立ち上がっており、煙道部になると考えられる。東側の突出部は焚口部と思われ、焚口部にも何らかの覆いがなされていたと考えられる。

○ SK-04 (第4図・図版4)

SK-03と同じくB-11区において、東側がやはり農業用道路によって分断された状態で確認された。主軸方向N 82°W、長さ現存で3.4m、巾1.87m、深さ0.3m、長さ0.7mの突出部をもち、径約10cmの柱穴が突出部の基部及び屑部より2本ずつ出土している。断面図から見ると、第2層灰色粘

質土及び第Ⅲ層黒色炭化物層が立ち上がっている。第Ⅳ層黄灰色土層は、天井部が陥落したものと考えられる。東側が調査できなかったので断定はできないが、他の土壌からみて、東から西へ傾斜しているものと思われる。

○ SK-05 (第4図・図版3)

C-7区において検出され、主軸方向N 90° Wに向き、長さ6.63m、巾1.73m、深さ0.25mの隅丸長方形で、西側に約0.35mの突出部をもつ。突出部基部に約10cmの柱穴が伴っている。突出部のすぐ東の床面がくぼんでおり、断面図からみると、第Ⅱ層灰黒色炭化物層及び第Ⅴ層の黒色炭化物層が立ち上がっている。第Ⅰ層黄灰色炭化物層及び第Ⅲ層黄色土ブロック層は、いずれも天井部分であったものと思われる。

○ SK-06 (第4図・図版3・4)

C-6区において確認され、主軸方向N 81° Wに向き、長さ4.5m、巾1.9m、深さ0.45mの楕円形で、やはり西側に長さ24cmの非常に短い突出部をもち、肩部に2本、床面に2本、南壁よりに3本の柱穴が検出された。断面図からみると、東から西へ向かって7°傾斜している。第Ⅳの灰黒色炭化物層が煙道部にあてはまるものと思われ、第Ⅴ層の黒灰色礫層は、焚口部の閉塞施設と考えられる。この土壌では、他の炭化遺構に見られた黄色土層の天井部分は開墾の際に消滅したと思われる。第Ⅱ層直上で須恵器高台付坏片が出土している。

以上炭化遺構について述べてみたが、いずれも丘陵の傾斜に直行して、東西方向をむき床面が東から西へ傾斜している。プランは突出部をもつものが5ヶ所、もたないものが1ヶ所となっている。現在まで東州津遺跡、昼間遺跡(西貝川地区)、足代遺跡(円通寺地区)で検出されていたが、時期・性格についてはわからなかった。今回の調査例を分析すると、竈に類似した煙道部をもち、それを覆うように柱穴が配置され、しかも東側の焚口部に閉塞施設と見られる。そして炭化物層の中には、クヌギカシと思われる炭化材が木炭状になって数多く出土している。以上の状況を総合して考えてみるならば、炭焼きに何らかの関係した遺構であると考えられるのである。なお時期についても分からなかったが、SK-06の須恵器片出土状態をみると、この炭化土壌に伴うものと考えられ、一応奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる。

(2) 集石土壌

○ SK-07 (第5図・図版5)

B-7区の床面直下で確認され、南側は道路によって切断されている為、規模はわからない。主軸がほぼ南北を向き、現存で長さ1.5m、巾1.0m、深さ0.45mの楕円形で、土壌内に大きさ5cmから30cmの和泉砂岩の石が投げこまれた状態で検出された。意図的に配列されたとは考えがたい。時期及び性格については不明である。

(3) 溝状遺構

A-1区において、SK-01の東を斜めに切りこんだ形で検出された。巾20cm、深さ20cm、U字形の断面を呈し、覆土は黄灰色の砂質土がはいっていることからみて、長期間にわたって水が流れた状態を示している。時期については、明治時代に、二枚の水田を一枚に直したと言われており、ちょうど以前の水田地境にあたり、その時の水路であることが確認された。

5. 遺物(第6図)

㉞ 土 器

○ 弥生式土器

自然作用により磨滅されたものが数十点、調査区の耕土及び床土内から出土している。いずれも小破片であるため、器種・器形は不明である。

○ 土 師 器

本遺跡の土器片の大部分を占めるものであり、主に垂の口縁部あるいは脚部の破片と、高台付環、杯の破片であり、いずれも耕土及び床土内から出土している。時期は奈良時代から平安時代のものと思われる。

○ 須 恵 器

SK-06より高台付坪片が出土している。表土内より環蓋のつまみを有したもの、同心円叩き、格子目叩きを施文した破片がみられる。

○ 瓦 器

炭化遺構・耕土あるいは床土より出土しているが、いずれも小破片のため器種、器形については不明である。

○ 瓦 片

B区耕土中より均正唐草文軒丸瓦が1点出土している。

表1 石器一覧表 (単位 mm)

番号	地区名	型式	長さ	幅	備 考
1	B-10	I	31	21	側部一部えぐり込みがある
2	B-10	#	21	11.5	先端を欠損
3	C-6	#	22	15	側部一部欠損
4	B-10	#	17	10	先端部欠損
5	B-10	#	12	11	#
6	B-2	#	22	15	#
7	B-7	#	25	15	#
8	B-10	#	21	11	側部半分欠損
9	B-9	II	23	19	先端部欠損
10	B-10	#	15	15	#
11	B-10	#	18	20	上部、基部欠損
12	B-10	III	22	17	#
13	B-9	#	25	19	先端部一部欠損
14	C-6	#	18	12	#
15	C-6	#	19	14	先端部、基部一部欠損
16	B-10	IV	13	13	
17	B-10	V	33	18	側部一部欠損
18	B-11	#	30	13	先端及び基部欠損
19	B-9		40	14	

㉞ 石 器

○ 石 鏃(表1)

表のように、B-7区SK-06、以外はすべて耕作土あるいは床土内の調査区東半分集中して出土している。石質はすべてサヌカイトである。形体は基部が平らなものをI型、弓状にくぼんだものをII型、三角形にえぐりこんだものをIII型、U字形にえぐりこんだものをIV型、柳葉形になったものをV型と仮定した。いずれも石核から剝離した剝片を2~3回細かく剝離調整加工したものである。長さも1.3cmから3.3cmとあり、対象物の大きさや用途によって石鏃を使い分けたのではないかと考えられる。

○ 石 鏃(表19)

B-9区の床土内より出土した。側部の半分と先端部を欠損しているため、全体の大きさは不詳であるが、現存する長さは4cm、巾1.4cmである。石鏃と同じくサヌカイトの剝片を細かく剝離している。

㊦ その他

○ 水 晶

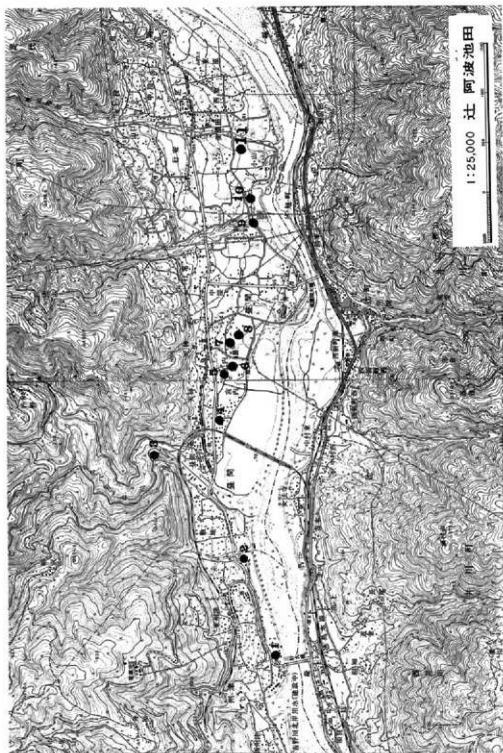
B-10区の床土内より長さ1.1cm、巾0.5cmの六角形の自然石が出土している。人工的な手は加えられておらず用途は不明である。産出地は、ちょうど吉野川対岸の井川町炭焼地区に水晶採取跡が今でも残っており、そこから持ってこられたものと思われる。

6. ま と め

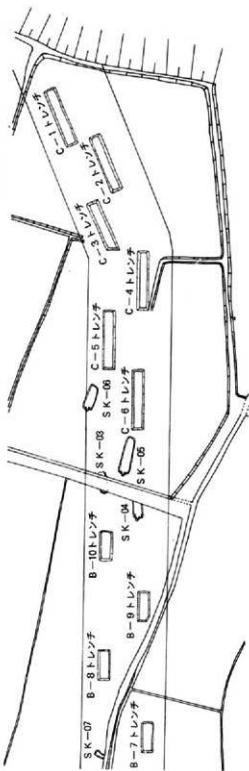
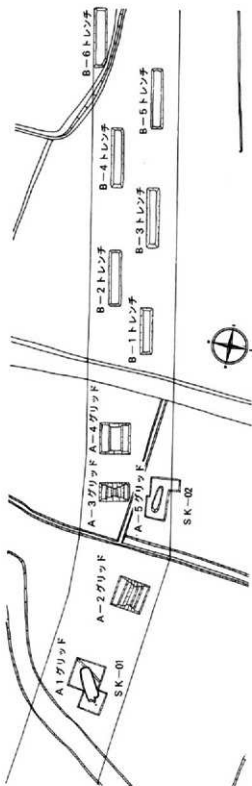
- (1) 黒川原谷川によって形成されたこの台地には、弥生時代から今日に至って生活が行われていたことが確認された。

今回調査した小原地区は、黒川原谷川によって形成された扇状地上にあり、調査区の各所で小礫層がみられた。特にC区においては、直径10～40cmの和泉砂岩の堆積がみられるため、たびたび小さな谷川が移動しながら形成されていたものと考えられる。そのため伏流水が数ヶ所にわたってみられ、粘土質の層と礫層が混っており、調査は極めて困難であった。

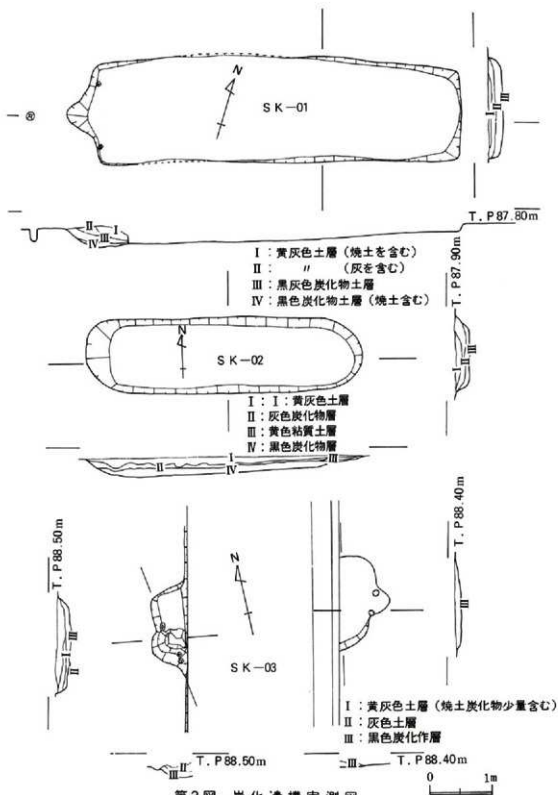
- (2) 炭化物を伴う炭化土塊が6ヶ所検出された。以前に東州津遺跡、昼間遺跡（西貝川地区）、足代遺跡（円通寺地区）などで検出されていたが、時期、性格については不明であったが、今回の調査で須恵器高台付環及び瓦器片が出土していることから、奈良時代から平安時代のものであることが判明した。また落ちこみ内の土層の堆積状況からみると、天井部を粘土でドーム状にぬりかため、突出部の方は煙道状の孔があったと思われる。又、東側に焚口部の閉塞施設がみられ、床面が突出部にむかって傾斜し、床面が赤く焼けていることからみて、短期間でしかも非常に高温の状態で何らかのものを焼いた施設と考えられる。しかも炭化材は、クヌギ、カシといった木材が混っており、一応現段階では炭焼きに使用された遺構と想定される。
- (3) 弥生式土器及び土師器片が磨滅した状態で出土していることからみて、この台地上部において弥生時代から平安時代にかけての数時代にわたるしかも広範囲な遺跡の存在が十分考えられる。
- (4) 昭和49年以降、池田・三好町における吉野川北岸農業用水利事業の工事に伴う発掘調査は、数次に亘っている。その結果、吉野川流域に形成された台地には、旧石器時代から我々の祖先が生活していた様子がうかがえる。本年度まで調査の方に労力が費やされ、遺物は未整理な状態であるため、当時の生活の詳細な分析をするまでに至っていない。今後、今までに発掘したものについて、整理を行い本報告書出版が急務である。



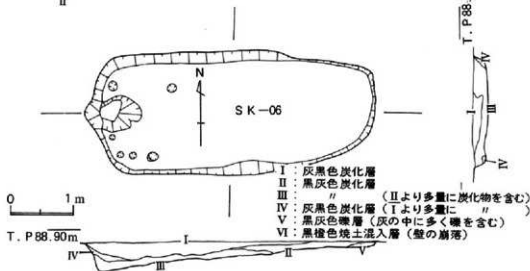
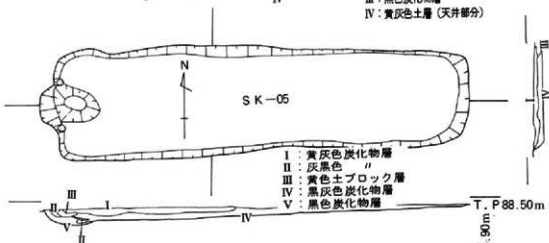
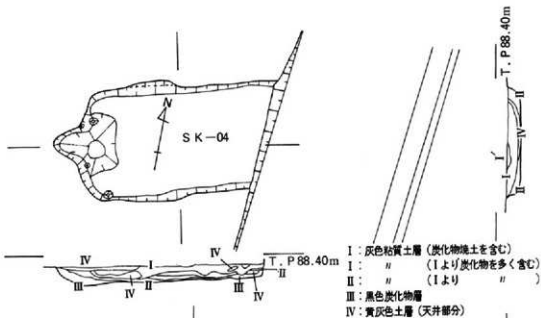
第1図 1. 州津遺跡 2. 東州津遺跡 3. 土取遺跡 4. 大柿遺跡 5. 京伝地区
 6. 天神前地区 7. 正力地区 8. 荒神前地区 9. 西貝川地区 10. 円通
 寺地区 11. 小原地区



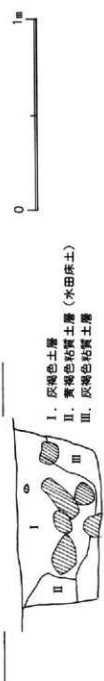
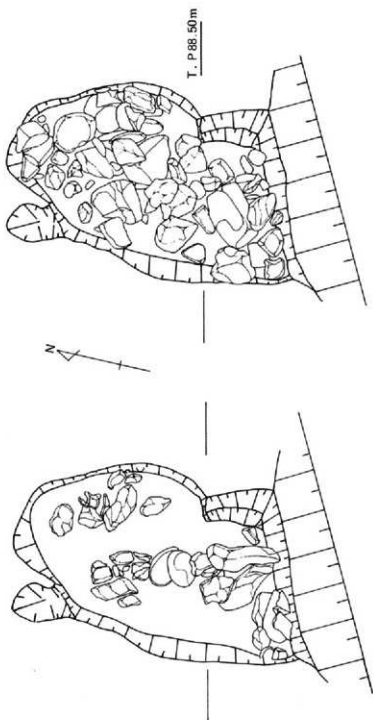
第2図 全測図



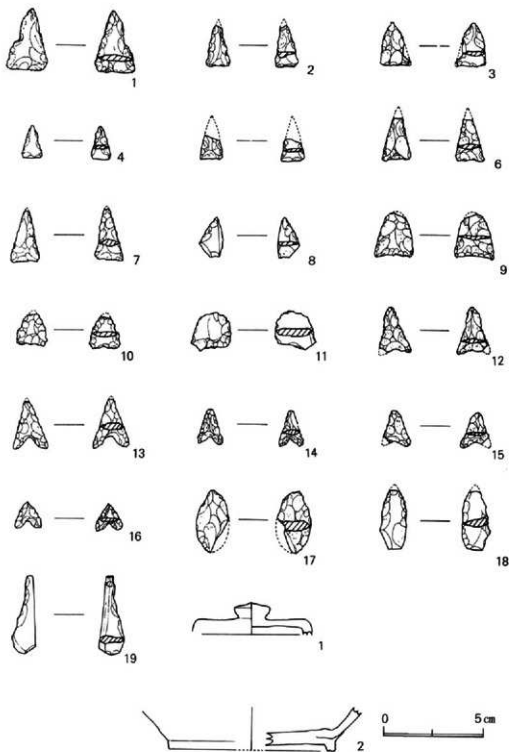
第3圖 炭化遺構実測図



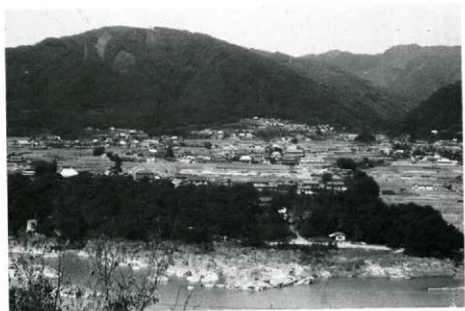
第4図 炭化遺構実測図



第5圖 集石土塚突測圖



第6圖 石製品及び須恵器実測圖 (1/2)



図版1 遺跡遠影



図版1 C区調査区全景



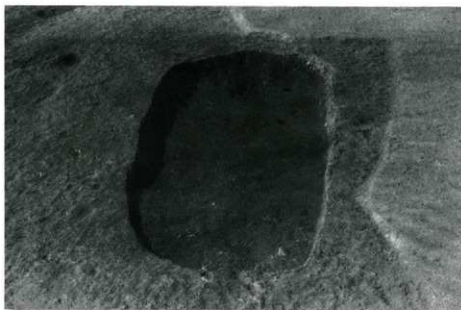
図版2 C区手前より第4・5・6トレンチ SK-05・06



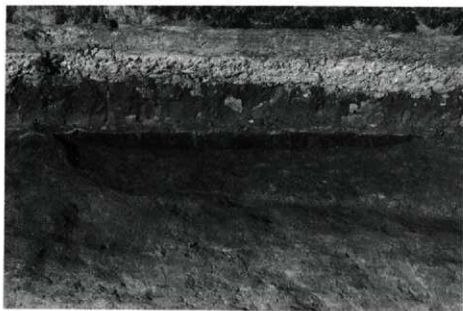
図版2 C区手前より第3・2・1トレンチ



図版3 SK-05



図版3 SK-06



圖版4 SK-04



圖版4 SK-06內出土，須惠器片



図版5 SK-07, 集石状態



図版5 SK-07, 掘り上がり状態

ひびき岩古墳群

17号墳発掘調査

目 次

はじめに	22
第1章 位置と周辺の遺跡	22
1. 遺跡の位置	22
2. 周辺の遺跡	22
第2章 調査の経過	26
第3章 外形及び石室	28
第4章 出土遺物	29
第5章 ま と め	32

はじめに

本報告書は、調査を担当した松永・小笠原の共著であり、下記にその分担を記す。

1. 写真は遺構が松永、遺物は立花が撮影を行った。
2. 1章、2章、3章、5章は松永が製図執筆し、4章は小笠原が製図執筆した。
3. 調査組織
調査総括 立花 博（県教委文化課文化財保護班長）
調査員 松永 住美（県教委文化課研修生）
小笠原 賢（県教委文化課文化財調査員）
作業協力者（順不同）

矢本アサコ 上田トヨノ 玉沢トシエ 美馬クニコ 久米マサノ

4. 調査期間及び本報告書作成にあたって、石井町教育委員会、徳島県博物館天羽利夫氏、徳島市教育委員会一山典氏にお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

第1章 位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の位置（第1図）

ひびき岩17号墳は、徳島県名西郡石井町字内容に位置する。この遺跡の所在する気延山山系は、標高212mの気延山を頂点として、四国山地から北東に延びた一支脈上にある。

気延山山系を南西から四国山地と分断するように鮎喰川が流れ、延命附近では流れを南北に向きをかえ吉野川に注いでいる。鮎喰川を対峙して、やはり四国山地から延びた眉山山系がある。北は渡内川と飯尾川による本県では広大な沖積平野を形成して下流の徳島平野へとつながり、吉野川をはさんで阿讃山脈がある。東は鮎喰川による沖積平野へとつながっている。

この古墳はちょうど鮎喰川流域下流の東斜面にあり、鮎喰川が吉野川に注ぐ位置を一望できる丘陵の先端上に位置しているのである。すなわち、この古墳を築造した集落及び生産地を一望できる位置に立地されていると思われる。

2. 周辺の遺跡（第1図）

ひびき岩17号墳は、国分寺跡、国分尼寺跡をはじめ、古代阿波における中心地の後背丘陵上にあり、総数百基をこえる気延山古墳群の中に位置する古墳である。以下時期ごとに述べてみたいと思うのである。

(1) 弥生時代

① 矢野（国府変電所）遺跡

本古墳群より南東1km余り、徳島市国府町矢野に位置する。現在四国電力矢野変電所内にあり、変電所内施設の建て替えにより数次にわたって調査が行われ、弥生時代後期前半から古墳時代前期にかけての集落址及び条理制遺構が確認されており、遺跡の地形は、鮎喰川にむかってなだらかに

下っていく微高地に南北に長く、相当広範囲に形成されている。

② 高川原遺跡

本古墳より北西に約1.8km余り離れた吉野川の沖積平野上にあり、名四郡石井町字高川原に位置する。昭和54年3月、町道27号線改良工事に伴って土器片が採集され、約半年間にわたって調査が行われた。調査の結果、弥生時代前期後半の阿方併行期から平安時代にかけての相当長期間にわたって集落が形成されていたことがわかった。非常に精巧な銅鐸形土製品（弥生時代後期前半・上東式併行期）、墨書土器（平安時代）などが出土している。調査の結果、本県では大柿遺跡（三好郡三好町昼間）に匹敵する最大規模の集落が形成されていることが判明した。

③ 清成遺跡

高川原遺跡より南西に1.6kmのところであり、渡内川によって形成された沖積平野上にある。昭和44年秋、農業試験場建設の際、土器片が見つかり徳島県博物館が緊急発掘調査を行った。その結果、堅穴住居址2、土壇1、溝状遺構（方形周溝墓の一辺？）1が確認された。当時では、本県で最初の住居址が確認されたことで注目を集めた。時期は、畿内第5様式の庄内併行期にあたる弥生時代後期終末期であると考えられる。

④ 源田遺跡

本古墳から南南東約2.4kmの徳島市国府町矢野字源田950の1番地に位置する。戦後間もない開墾によって、鮎喰川に注ぎこむ小さな谷の南東斜面から偶然に、高さ51.6cmの1号銅鐸、高さ41.5cmの2号銅鐸、破砕されている為規模不明の3号銅鐸の計3個の装束博文銅鐸が広形銅剣と供に出土している。そのうち1号銅鐸は三木文雄氏によると、鏡面のように外面を研磨している。

⑤ 安都真遺跡

源田遺跡より南南西に約1.5kmの徳島市入田町安都真268番地に位置する。鮎喰川中流の標高約50m余りの北斜面から、高さ29.4cmの1号銅鐸、高さ21.7cmの2号銅鐸、現高24.6cmの3号銅鐸、現高19cmの4号銅鐸の計4個の小型装束博文銅鐸が出土している。そのうち1号銅鐸は、岡山県倉吉市粒江町種松山遺跡出土の銅鐸と同范関係にある。

(2) 古墳時代

本古墳の所在する気延山古墳群は、現在わかっている範囲では奥谷1号墳（前方後方墳）、奥谷2号墳（円墳に突出部をもつ）をはじめとする4世紀後半から、県史跡指定の矢野の横穴古墳の6世紀後半に至るまでの相当長期間にわたる古墳の築造がみられるのである。この気延山古墳群は、各尾根ごとに前方後円（後方）墳、あるいは円墳に突出部をもつ古墳を中心に、いくつかの支群にわかれるようであるが、現在のところ明確に分類は出来ておらず、しかも今後の調査によって更に数は増していくものと考えられ、ここでは支群ごとにわけるとはさげたいと思う。以下古墳群の中で主な古墳について述べてみたいと思うのである。

⑥ 宮谷古墳

気延山古墳の中で一番南側の尾根の丘陵先端にあり、徳島市国府町西矢野字宮谷に位置する。海抜約40mで、主軸がほぼ東西になり、前方部が鮎喰川に向き、後円部が気延山山系に向いている。昭和47年、徳島考古学グループの実測した図面によると、後円部径約25m、前方部長さ約15mの全長約40m、前方部最大巾（先端部）10.5m、くびれ部10m、後円部高さ現高で3.8m、前方部

高さ現高で1.4mである。丘陵の斜面を利用し、後円部は一部盛土、前方部は丘陵の削平によって築成している。自然地形を利用している為か、前方部が現高で2mほど低くなっており、しかも中軸線が前方部においてやや南に傾いている。すでに開墾により削平されている為、内部主体は不明である。時期は4世紀後半と思われる。

⑦ 奥谷1号墳（奥谷前方後方墳）

宮谷古墳のすぐ北側の丘陵先端にあり、徳島市国府町西矢野字奥谷226番地に位置する。宮谷古墳と同じく海拔約40mあり、主軸は南東方向を向き、宮谷古墳とは全く逆に前方部を気延山山頂、後方が鮎喰川に向いている。昭和46年に徳島考古学研究会グループが実測した図面によると、前方部長さ約20m、後方部長さ約30mであるが、後方部先端は開墾によって削られ現在ミカン畑となっている為、築造当初の規模は不明である。

前方部はくびれ部より先端部がやや広く、後方部はほぼ正方形に近い形であると思われる。丘陵先端の斜面を利用し前方部及び後円部とも一部盛土を用いて築造を行っている。自然地形を利用している為、前方部が後円部より約50cm程高くなっている。後円墳及びくびれ部より円筒埴輪の破片が出土している。後円部中央に盗掘坑がみられ、内部主体は不明である。円筒埴輪の編年からみて、時期は4世紀後半と思われる。

⑧ 矢野の横穴古墳

奥谷1号墳から小さな谷をへだてた海拔20m余りの丘陵先端にあり、徳島市国府町矢野山林39番地に位置する。墳頂部及び東側、南側は削られている為、正確な規模は不明である。主体部の横穴式石室は南東に主軸をもち、規模は全長8.0m、玄室長3.8m、玄室長最大巾2.4m、玄室高2.5m、羨道部長4.2m、羨道部高1.8m、玄門巾2.0m、現存玄門入口巾2.2mと玄門部がやや広くなっている。奥壁は一枚岩の結晶片岩を用い、側壁も結晶片岩で、本扉ではやや大きい片岩を使用している。側壁は床面より天井部にかけてやや持ち送っており、玄室部天井も中央部は前後の天井石から持ち送っている。時期は6世紀後半と思われる。

⑨ 奥谷2号墳

奥谷1号墳より約500mほど西に気延山頂上へ向かって登っていく丘陵のテラスにあり、徳島市国府町西矢野字奥谷193番地に位置する。昭和55年5月徳島市教育委員会が、四国電力鉄塔建設に伴う発掘調査を行った。海拔116m余りあり、主軸が東南東になり、後円部を鮎喰川、突出部を気延山に向いている。自然地形をうまく利用して、突出部は削平、後円部は一部盛土となっている。径11mの円墳に、巾3m、長さ7mの突出部をもち、径18m余りである。

円墳及び突出部とも直径20～60cmの結晶片岩製の貼石をめぐらしており、円墳の裾部分、突出部の北半分、くびれ部は整然とした配列がみられる。内部主体は、堅穴式石室2、組合式箱式石棺1の計3ヶ所が確認されている。第1主体部は主軸がほぼ東西を向き、長さ3.18m、巾は東で1.1m、西で0.96m、高さは上部が攪乱を受けている為、築造当初の高さは分からないが、現存0.5mである。壁面は4面とも最下段は横積み、それより上面は小口積みとなっている。上面ほど巾が狭くなっており合掌形石室になっている。第2主体部は、長さ2.7m、巾0.6m、高さは攪乱の為不明である。石室の組み方は、第1号主体部と同じである。第3主体部は、堅穴式石室とは異なりやや南にふれ、長さ0.88m、巾0.36mで床面を合わせて5枚の結晶片岩で構築され

ている。出土遺物は第1主体部より鉄鉢1点が出土している。古墳の築造時期は出土遺物、墳形からみて、4世紀後半から5世紀前半と思われる。

⑩ 尼寺5号墳

ひびき岩17号墳より北北東0.3km余りの気延山山系北東部の丘陵上にあり、名西郡石井町尼寺251番地に位置する。昭和44年1月徳島県博物館により調査が行われた。海拔30mほどの丘陵先端、「山神さん」と呼ばれている小祠のすぐ北側にあり、「山神さん古墳」あるいは「徳里横穴古墳」とも呼ばれている。墳丘は削平されているため、規模は全く不明である。内部主体は、主軸がほぼ東西に向いた片袖式の横穴式石室である。天井部及び玄門石は抜きとられており、玄室長さ2.62m、巾1.8m、高さ1.3m、羨道部長さ3.2m、巾0.85m、高さ現存1.2mである。石室の底部は岩盤を削りとり、岩盤の上に結晶片岩の割石を最下段は横積みし、その上は小口積みと横積みを交互に積み重ねている。床面は結晶片岩の小さい割石を敷きつめている。遺物としては、須恵器の高坏の脚破片が3片出土している。時期は遺物からみて6世紀後半と考えられる。

⑪ 清成古墳

清成遺跡の南500mの海拔30mほどの気延山から西に延びた尾根の丘陵先端上にあり、名西郡石井町清成2996番地に位置する。昭和43年7月徳島県博物館によって調査が行われた。墳丘は、北側、西側、東側がすでに削平され、墳頂部も幾度かの擾乱によって、東西に大きくなごみができている。墳丘部の葺石状態からみて、径15mほどの円墳である。

内部主体は、ほぼ東西に主軸を向けた堅穴式石室で、地山を岩盤まで掘り込み長さ5.52m、巾0.75m、高さ0.45mで、天井部は一枚だけ残っており他はすでに抜き去られていた。出土遺物は、石室内より長さ27.8cm、断面菱形の鉄鉢1個と長さ6.8cmの有茎柳葉式鉄鉢1個が出土した。また墳丘の葺石の間から非常に作りの粗い底部穿孔土器が押しつぶされた形で出土した。時期は出土遺物からみて、5世紀中ごろであると思われる。

⑫ 曾我氏神社古墳

清成古墳より2つほど丘陵をへだてた、西約0.7km、海拔約50mの丘陵先端上にあり、名西郡石井町城ノ内に位置する。昭和55年3月に1号墳、8月に2号墳の2回にかけて、徳島県博物館によって調査が行われた。1号墳は径10mの円墳の西側に長さ3m、巾2.5mの突出部をもち、墳丘基底部に巾0.7mの結晶片岩の割石を敷いたテラスがまわっている。墳頂部は擾乱により大きくへこんでおり、築造当時の高さはわからない。墳丘中央部に、主軸をほぼ東西に向けて2つの堅穴式石室があり、いずれも天井部を失っている。

北側の第1石室は、長さ4.2m、巾西で0.7m、東で0.95m、高さ0.6mで結晶片岩の割石を小口積みしている。床面は五砂利を敷きつめ、中央部が丸くくぼんでいる。石室内より銅鏡（四獣鏡）、鉄剣、鉄鏃、鉄斧、鉄施、鉄刀子が出土している。南側の第2石室は、高さ2m、巾0.7mでやはり結晶片岩の割石を小口積みしている。床面は粘土を敷きつめている。堅穴式石室内より銅鏡（珠文鏡）、石鏡、勾玉、管玉、ガラス小玉が出土している。

2号墳は、1号墳に接するようにすぐ北側にあり、東西10m、南北12mの方墳である。中央部は擾乱により大きくへこんでいる。墳丘基底部はやはり結晶片岩の割石を敷いたテラスが廻っている。内部主体は、方墳中央部に長さ3.7m、巾0.7m余り、高さ0.55mの堅穴式石室である。天井石はす

でに抜きとられており、石室内より、鉄剣、鉄斧、鉄鎚、鉄鎌、直刀、鉄鏝が出土している。時期については、1号墳、2号墳とも4世紀後半から5世紀前半と思われる。

(3) 歴史時代

① 阿波国分尼寺跡

本古墳のすぐ東側、海拔10m余りの水田の中にあり、名西郡石井町石井字尼寺に位置する。昭和45年に第1次、昭和46年に第2次調査が行われた。第1次調査では、主に金堂跡と推定されていた墓地の部分を中心に行い、凝灰岩の地覆石を検出した。金堂の輪郭から天平尺で間口93尺、奥行60尺の規模であることを確認した。第2次調査では、寺域の確認を中心に行った。西城・東城の溝からみて、寺域の範囲は天平尺の1町半四方(158m)であることが確認された。北限の調査では、中軸線上に3間一戸の北門が検出された。桁行が中央柱間で12尺、両脇間で11尺、梁行で11尺の八脚門であることが確認された。西妻柱より2m離れて玉石敷の雨落溝が検出され、国分尼寺の北門としては、相当立派なものであることがわかった。なお南城はちょうど道路下にあると思われ、南大門跡は未確認である。中門、金堂、北門の中軸線は真北から西へ11度ふれており、この地域の条理制地割とほぼ一致している。出土遺物の瓦、土師器、瓦器、などからみて、寺の存続期間は奈良時代から平安時代初頭であったと思われる。昭和48年4月14日に国史跡指定となっている。

② 阿波国分寺跡

阿波国分尼寺より南南東1.5kmの鮎喰川によって形成された平野の末端、海拔約14m前後に立地している。西国霊場15番札所「国分寺」を中心に、徳島市国府町矢野に位置する。昭和61年5月市道拡幅工事に伴う緊急調査によって南大門跡らしき遺構が検出された。

昭和53年より昭和55年にかけて、徳島市教育委員会が寺域及び伽藍配置などを解明する為に調査を行ったが、後世の土地利用が激しく、創建当時の明確な遺構は確認されていない。現存までの調査や、瓦の出土範囲などから推定すると、天平尺で二町半四方であったと推定される。時期は、国分尼寺跡と同様、奈良時代から平安時代にかけて存続したと思われる。

第2章 調査の経過

昭和54年4月末、高川原遺跡を調査中に、ひびき岩古墳群一帯の山林所有者である久米武義氏より裏山が崩壊の恐れがあるところから丘陵の急斜面を削平中に古墳らしきものが見つかったとの連絡で現地へ赴いた。従来では、遺跡台帳に登録はなく、徳島考古学研究グループの踏査の折にも樹木が生い茂り、未確認地帯であった。現地は、丘陵の北側は崖となっており、崖面の最上部に堤堰が露頭していた。

早速協議に入り、崩壊の可能性が強いため現状保存は難しいとの結論に達し、記録保存を行うことにした。5月22日より6月6日まで調査を行った。

5月22日 地形測量

5月23日 崖面の断面から想定して、第1トレンチを入れる。夕方までに石室らしき跡を確認。

5月24日 石室、羨道部の範囲を確認。横穴式石室であると断定、写真撮影。

- 5月25日 石室、羨道部の開墾による動いた石を排除し、石室内の調査に入る。耳環、玉類出土。附属中学校講師松永雅行氏見学にこられる。
- 5月26日 石室、羨道部の調査。玉類、鉄製品出土。附属中学校講師松永雅行氏及び生徒3名見学にこられる。
- 5月28日 第2トレンチ発掘、石室図面割り、地形測量ならびに第2トレンチ写真撮影。
- 5月29日 第3トレンチ発掘及び写真撮影。石室平面図及び遺物出土配置図作製。
- 5月30日 第4トレンチ発掘及び写真撮影。石室平面図及び遺物出土配置図作製。
- 5月31日 第3、第4トレンチ埋め戻し。石室平面図作製、遺物出土配置図完了。石室内土壌水洗い。
- 6月1日 第2トレンチ埋め戻し。石室平面図、断面図完了。出土土器及び石室内土壌水洗い。地形測量。
- 6月2日 地形測量及び石室内土壌水洗い。
- 6月3日～6月6日 地形測量
- 6月10日 石井小学校尼寺分校で現地説明会開催。約50名ほどの参加者があった。

このひびき岩古墳群は、今回の調査が始まるまで15基の古墳群と遺跡台帳に登録されていた。丘陵先端部を削り取る為、樹木が伐採されており、非常に見通しがよくなり周辺の踏査を行った結果、ひびき岩17号墳より西南西約20mの所に、主軸がほぼ東西になり、全長23m、後円部径11m、前方部長さ12m、くびれ部巾10m、前方部最大巾15m、後円部を平地に、前方部を丘陵上面に向けた前方後円墳が確認され、ひびき岩16号墳と名付けた。本古墳は、気延山山頂から北東に延びた丘陵が傾斜し、本古墳の位置する海拔約23.5m付近でなだらかになり、そのなだらかな丘陵先端を前方部で丘陵面をカットし、前方部は削り出し、後円部は盛土を行って古墳を築造している。前方部巾がくびれ部より大きく開き、後円部より発達していることからみて、後期古墳になるものと思われ、気延山古墳群において、他の前方後円（方）墳が前期古墳に位置づけられているので、特異な存在であると考えられる。

ひびき岩17号墳より南東約25m離れ、丘陵が開墾によって段がつき、その一段下った丘陵先端の南東斜面の竹林の中に、直径8m、高さ1.5mの小円墳が確認され、ひびき岩18号墳と名付けた。墳丘中央部は大きくくぼんでおり、擾乱をうけているようである。

昭和55年12月中旬、秋の台風の影響により崖面の一部が崩れ落ち、建物崩壊の危険が出てきた為、丘陵の東端を削平中に横穴式石室の残欠が確認され、ひびき岩19号墳として12月下旬にかけて、石井町教育委員会によって調査が行われた。正確な規模、遺物については分からないが、6世紀終末の古墳と思われる。

現在では、ひびき岩17号墳、19号墳ともすでに削りとられて消滅している。

第3章 外形及び石室

一、外形（第2図）

本古墳は、調査のいきさつのところでも述べたように、外見上は丘陵がなだらかに傾斜し、東へ20mほどで急傾斜し、道路をへだてて阿波国分尼寺跡の寺域である平地となるのである。墳形は、今回の裏山崩壊防止の為の削平がなければ分からないほど墳丘の盛り上がりは全くなく、わずかに丘陵先端上においてテラス状になっているようであった。地形測量からみると、ひびき岩16号墳外の-320cmの等高線からなだかになり、-360cmの等高線のみが丘陵上部に向かって逆に上がっている。そして-520cmの等高線がやや丸みをもっており、この二本の等高線がほぼ墳丘の範囲を表わすものと考えられる。それ以外の等高線は丘陵形成時の自然傾斜の等高線とほぼ同様になっており、二本の等高線によって、わずかに古墳の墳丘らしき様相を残していると思われる。所有者及び古老の話を総合すると、戦前及び戦後2回にわたる開墾を行ったそうであるが、その際にはすでにマウンドらしきものではなく、相当古い時期に墳丘の盛土は削平されたものと思われる。したがって墳丘の規模は、二本の等高線の範囲、石室の位置、大きさから推定すると、直径約10m、高さ約3m前後の円墳であったと考えられる。

二、石室（第3図・第4図）

石室も墳丘と同様、開墾による擾乱を受けたものと見られ、天井部はすでに抜き去られたと思われ、全然見当らない。側壁部分も写真（図版1）のように羨道部からみて、左側の最下段以外は抜きとられ、一部は石室中央部に雑然と投げこまれた状態で見られたのであるが、投げこまれている石材量だけでは側壁全体が構築されたとは考えがたく、天井石とともに利用出来るものは抜き取った後、何らかに再利用したものと考えられる。

石室は、片袖の玄室に羨道部をもつ横穴式石室である。玄室は床面で長さ1.75m、巾は中央部、入口部、奥壁部とも1.75mであり、縦・横の寸法が同じ正方形プランを呈している。

石材は、この気延山山系から産出する結晶片岩製の割石を使用し、大きさ20cmから60cmの石を横積みと縦積みで構築している。羨道部より見て左側が袖部となり、この巾が80cmである。玄室高さは、よく残存しているところでも最下段のみで、わずか30cm程しか残っていない為不明である。特に羨道部からみて、右側及び奥壁はわずか1個ずつしか残っていない。

羨道部も今回の調査直前の削りとり及びそれ以前の開墾によって、大半部がなくなったものと思われ、現存部分が長さ1.1m、巾0.7m、高さ0.45m前後である。

本来、他の横穴式石室の状態からみて、推定で1.5m以上の長さはあったものと考えられる。

石室の構築は、気延山山系の地山である結晶片岩質のやわらかい岩盤を、石室よりそれぞれ20cmから30cm巾をもって広く削り取り、岩盤直上に石室を構築しているようである。石室の後ごめは、岩盤をくり抜いた小細片の片岩と土砂をもって行われたようであるが、床面直上までの擾乱によって確認しがたい。

床面は、岩盤を平らに削り、その上に粘土質の赤土を厚さ10cmほど敷いて固め、直径3cmから10cmほどの小円礫を平坦に敷きつめていた。小円礫の石材は、石質からみて古墳の東側を流れる駄焼川から運んだものと思われる。

石室床面には、羨道部より1.1m奥壁によったところで、巾10～15cm、高さ15cmの結晶片岩の割合で間仕切りを行っている。

床面は、幾度かの埋葬が行われたとみえて、間仕切り石のすぐ北側の床面で、巾50cmにわたって長さ20cm、巾10cm余りの片岩の割石をもって、小円礫の上を覆い、二次的な床面を形成している。

すなわち、小円礫を敷いた床面の上に二次埋葬を行う際に片岩製の平たい割石をもって床面の上に作りなおし、埋葬を行ったと思われる。

この埋葬の差は、管玉の石材の違い、耳環が両面の床面でそれぞれ一対ずつ出土していること、玄室内の北東隅で須恵器と馬具が間に埋土をもって上下に重なっていることからみても明らかにわかるのである。

玄室と羨道部の境には、長さ75cm、巾35cm、厚さ20cm余りの結晶片岩の割石が床面に埋めこまれた状態で障石のようにして置かれていた。羨道部の床面は、覆土と床面の土壌の区別がつかず明確にはわからないが、出土遺物の高さ、羨道部に一部分敷かれている片岩の状態からみて、玄室床面とほぼ同じ高さ、もしくはやや高い状態であると考えられる。

第4章 出土遺物

一、須恵器（第5・6図、図版5）

本古墳からは24個体以上の須恵器が出土し、内訳は坏壺9個、坏身5個、高坏2個、短頸壺4個、提瓶4個である。1・2・3は石室内南東隅より出土し、他は全て玄門部外側に集中していた。坏身と蓋とがセットとなっているものもある（12・22）。

(1) 坏（4・5・7～10・12・14・18・19・21・22）

4. 色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土には細砂が含まれる。回転ヘラ削りが施され、ゆるやかに内湾しながら丸味のある口唇部に至る。内面にはロクロ痕が明瞭に残る。
5. 外面上半部付近まで回転ヘラ削りが施され、体部立ち上がり付近で大きく内湾する。口唇部内側には稜を有す。色調は濃灰青色で、焼成は良好である。
7. 外面は体部中位まで回転ヘラ削りが行われ、鋭い稜をもつ受部まで、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。受部には沈線様の窪みが一周する。
8. 内外面ともにロクロ痕が窺える。回転ヘラ削りの認められる上半部よりゆるやかに内湾しながら厚味のある口唇部に至る。口唇部内面には沈線様の稜が残る。灰青色を呈し、胎土には砂粒が若干含まれる。
9. 内面にはロクロ痕が明瞭に残る。口唇部内面には稜を形成し、体部外面上位まで回転ヘラ削りが施されている。色調は灰青色を呈する。
10. 内外面とも比較的丁寧に調整が行われ、体部下位程まで回転ヘラ削りが施されている。胎土には砂粒が含まれ、色調は灰青色を呈する。口唇部は受部より外反気味に立ち上がる。
12. 身、蓋ともに外面には回転ヘラ削りが施され、内面にはロクロ痕が残る。身にはわずかにゆがみが見られ、口唇部は内傾して立ち上がる。

14. 口縁部には外面に弱い稜が見られる。色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。
18. 受部の一部が欠失する。粗雑な回転ヘラ削りとロクロ痕を残す。口縁部は肥厚し、外反気味に立ち上がる。受部は外上方に鋭く突出している。青灰色を呈し、焼成は良好と言える。
19. 外面には回転ヘラ削りとロクロ痕を明瞭に残す。内面中央部は指頭による押圧によりやや窪んでいる。青灰色を呈し、胎土には比較的砂粒の多いものが使用されている。
21. 内面にはロクロ痕が明瞭に残る。内面口唇部下に稜を形成し、外面には体部上位に弱い稜を有する。中位より回転ヘラ削りが見られ、色調は灰青色を呈する。
22. 身は受部をわずかに欠失する。口縁部は内傾して立ち上がり、外反気味となる。蓋は口唇部内側に弱い稜をもち、外面口唇部下には沈線用のロクロ痕が残る。身、蓋ともに外面には回転ヘラ削り、内面にはロクロ痕が認められる。
- (2) 高 環 (3・11)
3. 焼成はきわめて不良で、淡褐色を呈し、非常にもろい。環部外面には2段の稜をもち、口縁部はわずかに肥厚する。脚部は2段のスカシ孔が対称位置に穿たれている。スカシ孔の上段と下段は、脚部中位の2本の沈線によって区分される。沈線間は若干ふくらみをもっている。また上段のスカシ孔は完全に穿孔されておらず深い沈線様となる。環部と脚部の接合部分より、脚部中央でややすぼまり、ゆるやかに外反し広がりながら裾端部付近で大きく外反する。
11. 2段のスカシ孔が3ヶ所に穿たれている脚部は中位が最も細く、裾に向かって末広がりに広がる。裾端部付近で大きく外反し、反り上がり気味となる。中位の2本の沈線によって脚部の上位と下位が区分されている。スカシ孔はややねじれて穿たれており、穿孔時の工具の痕が認められる。環部には中位と下位に稜が認められ、底面は平坦である。口唇部には丸味があり、器表面には回転ヘラ削りが施されている。環部、脚部ともロクロ痕が明瞭に残っている。
- (3) 短 頸 壺 (1, 16, 17, 20)
1. 底部には回転ヘラ削りが、体部から肩部にかけてはハケ状工具による整形が施されている。底部から体部にかけて焼成時の剝離痕が窺える。体部中位には接合痕が明瞭に残る。肩部は丸く、口縁部はやや肥厚する。
16. 底部より肩部までは半球形を呈し、肩部より内傾し口頸部に至る。底部は回転ヘラ削りが施され、内面にはロクロ痕が明瞭に認められる。器面は粗く、色調は青灰色を呈する。
17. 底部からやや外方に広がりながら斜上し、丸味のある肩部に至る。口縁部はわずかにふくらみをもつ。肩部直下には接合痕が窺える。頸部周辺に蓋らしきものを重ねて焼いたと思われる痕跡をとどめ、その口縁部の一部が付着している。またその付近より、砂質の土が溶解し、底部まで流れ落ち、上面には自然釉が見られる。
20. 肩部直下までヘラによる削りが見られ、肩部は稜を形成する。口唇部は丸味を帯び、内面にはロクロ痕が明瞭に残る。
- (4) 提 瓶 (2, 6, 13, 15)
2. 口縁部の一部が欠失する。両面ともやや丸味のある胴部にいぼ状の突起を貼り付けている。胴部片面には回転ヘラ削りが見られ、片面には、内面に閉鎖痕が認められる。灰青色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成は良好である。

6. 若干の細砂を混じえる胎土で、焼成は良好であり、灰青色ないし濃灰青色を呈する。胴部平坦面、丸味のある面とも中心より6単位のハケ状工具による同心円文様となる。丸味のある面の内面には閉鎖痕が認められ、頸部接合部や下には鉤状の耳を有する。口縁部は大きく外半し、肥厚した口唇部に至る。

13. 口唇部とその直下に稜を形成し、口頸部はややゆがんだ形状を呈す。耳は鉤状のものがやや退化した形状のものであり比較的小型のものである。成形、調整は粗雑で平坦面はヘラ削りされている。ふくらみのある面の内面には閉鎖痕が認められる。焼成は良好であるが、自然釉がわずかに見られる。胎土には比較的砂粒の多いものを使用され、色調は灰青色ないし濃灰青色を呈する。

15. 外観は小型壺型土器と言えそうな器形である。耳は見られないが、平坦面と丸味を帯びた面を有し、側面から見ると厚味をもつ。口頸部は外反しながら、肥厚し丸味のある口唇部に至る。口唇部内側には沈線様の段を形成する。内面には自然釉の付着が認められる。器表面はタタキ目とハケ目文が見られ、閉鎖痕は平坦面内面に認められる。焼成は良好、胎土には若干の砂粒が含まれている。

二. 玉 類 (第2表, 第7・8図, 図版6,7)

89点のうち管玉9点, 切子玉5点, 算盤玉2点, 石玉1点, ガラス玉72点がほぼ完存している。

管玉はすべて碧玉製であり, 6点が濃緑か緑色を呈し(1~3, 6~8)2点はやや小型のもので風化が進み青みがかった白色を呈す(4, 5)。9は最も小さく灰味を有する緑色を呈す。

切小玉, 算盤玉には水晶が使用され, 切小玉は六面体に算盤玉は円形に丁寧に成形調整されている。

石玉は自然石に孔を穿ったもので(17)不整形で表面に光沢のある石材が選ばれている。

ガラス玉72点の内わけは, 白玉17個, 小玉55個である。ほとんどのものが灰味のある青色を呈す。緑味のあるものも存在し白玉1点(39)と小玉15点(44, 45, 49, 50, 56, 72, 75~82, 84, 85, 88)を数える。淡緑色を呈するものは3個(86, 87, 89)存在し, 83は黄味のある緑色を呈す。また, 青緑に近いものは他のものより透明度が増している。

色調より判断すると, ほとんどのものがアルカリ石灰ガラスより作出されたようであり, 淡緑色を呈するものは, 鉛ガラス製の可能性が考えられる。

作出技法については切り離し瘤, 切り離し面, 形態特徴より判断すると白玉は截断法によるものであり, 小玉は, 巻き付け法, 截断法の両技法によって作出されているようである。

三. 耳 飾 (第7図, 図版8)

金環1点, 銀環4点, 不明1点の出土が見られる。金環(5)は約4分の3を欠失する。金薄が内側に僅かに残っており, 内部の銅環が腐蝕し, 細く軟化している。銀環は4点すべてがほぼ完存し, 1・4に若干の銀薄剥離が見られる。断面形状はほぼ円形で出土状況から見ると1・2が1対, 3・4で1対となる。6は, 金薄, 銀薄が剥離してしまっており, 内部の銅環が腐蝕している。

四. 鉄 製 品 (第1表, 第9・10図, 図版8)

鉄 鍔 (1~13)

さまざまな形態が見られる。すべて有蓋鍔であり, 逆刺を有するものや平根, 尖根といわれるものもある(1・5・8・9)。大型のもの(1~11)は身厚が約3~1.5mmあり, 小型のものは1.5~1mmの厚さを持つ。蓋の断面形状はすべて長方形を呈し, くびれより蓋の先端にかけては丸い断面

形をなす。刃部の作出は身中央を両面ともふくらませて作出しているものと、片面は扁平で片面をふくらませたもの(2・4・9・10)とが認められる。

刀 子 (14~19)

刃部の断面形は二等辺三角形様であり、背部分厚は4mm程である。刃部と茎部の区画が明確なものの(15)とそうでないもの(17・18・19)とに分けられる。また刃部先端よりゆるやかに広がりながら刃を形成するもの(16)と、背と平行に刃を形成するものも認められる。すべて酸化が進んでおり、錆によってその形状の不明確なものもみられる。

不明鉄製品 (20・21)

20は、身と茎とに分かれるが、身の先端部分のみが刃部となり、他の部分は断面が方形に近い形状を成し、茎部分も丸味のある方形となる。

21は円形状になりそうで、鉄のピンと鉄帯状のものが認められる。馬具の可能性が考えられる。

他の鉄製品としては、轡の出土が見られたが、現在元興寺研究所で処理中のため記載出来なかった。

※整理作業継続中であり、本略報に記載したものは実測可能なもののみである。

第5章 ま と め

本古墳は今回の調査以前には、地表からの観察では全くわからず、丘陵先端の自然地形を思わすものであったが、地表下約80cmの処に、開壘によって石室の大半がすでになくなり、わずかに石室最下段部と羨道部の一部を残していた。ひびき岩17号墳の名も、従来のひびき岩古墳群の同じ丘陵上にあることから、今回の調査によりひびき岩16号墳、ひびき岩18号墳とともに名付けられたものであるが、現在は削りとられ消滅した古墳である。

内部主体は、ほぼ正方形プランの玄室をもち、しかも玄室部分を間仕切り石でもって石室内を区画している。

埋葬回数は、最初に間仕切り石より奥壁よりに埋葬を行ったようであり、碧玉製管玉、ガラス小玉が床一面にちらばっていた。2回目の埋葬は、間仕切り石の羨道部側より行われたと考えられ、床面より銀環と滑石製管玉が出土している。更に築造当初の床面の上に、結晶片岩製の板石でもって床面を新たに形成し埋葬を行っており、銀環が出土している。出土遺物の状態や床面の構成からみて、最低3回における埋葬が行われたと思われる。

玄室内に間仕切り石をもつ古墳は、現在までの調査報告を見ると、本県では本古墳だけであり、他に類例がないのであるが、昭和46年から47年にかけての徳島考古学研究会グループが、氣延山古墳群の踏査を行った際、現存しないが徳島市国府町奥谷64番地の山花2号墳(仮称)の内部主体が3基の壜穴式石室となっている。小円墳の中に3基の壜穴式石室があることは自然であり、この地方の壜穴式石室の天井部は持ち送りがなく平担であることから、天井部からみると壜穴式石室と区別がつきにくいし、仮に羨道部の障石と間仕切り石をそれぞれ側壁と見れば、壜穴式石室を壜穴式石室と見まちがったと考えられ、しかも踏査当時には聞き取り調査であり、相当以前に開壘されて消滅している為推定の域を出ない

のである。

現在まで気延山山系の横穴式石室は、すでにほとんどが消滅しており、しかも盗掘を受けている為、遺物の出土位置、出土遺物と古墳との一致がはっきりせず、わずかに尼寺5号墳の高坏脚片のみが一致するのみであった。今回の調査によって、土器及び玉類、鉄製品などが一応セットとしてとらえられ、気延山山系における横穴式石室の時期も明確にとらえられたのである。

築造時期については、出土遺物の須恵器坏、高坏、短頸壺、提振などからみると、陶邑による型式編年のⅡ型式第4段階（A D540～620年）にほぼ類似するものであり、6世紀後半にあてはまるものと思われる。

気延山古墳群の築造時期をみると、4世紀後半から6世紀後半の間に、百数十基(推定)の古墳群が形成されているが、前期古墳については墳丘測量、発掘調査は徐々に進みつつあるが、後期古墳についてはまだ十分検討の余地を残しており、気延山古墳群の変遷過程及び各支群の解明とともに、古墳群を支えていた集落址、生産遺構の解明が必要であると考えられる。

第1表 鉄製品計測値

《鉄 鋸》

番号	種類	身長	茎上半長	茎下半長	身幅(最大)	厚	茎上半厚×幅
1	鋸	49	17	8	45	2	5×7
2	鋸	55	28	28	27	1.5	5×10
3	鋸	49	33	32	22	3	4×8.5
4	鋸	58	25	42	24	2	4×8.5
5	鋸	68	44		28	2	3×7
6	鋸	38	22	23	29	2	3.5×9
7	鋸	51	22	10	32	3	5×9.5
8	鋸	56	11		33.5	2	5×9
9	鋸	65	26		32	2	5×8
10	鋸	47	23	23	20	2.5	3×9
11	鋸	36	12	9	22	1.5	5×6
12	鋸	24	33		10.5	1	3×5.5
13	鋸	30	6		13.5	1.5	2×2

《刀 子》

番号	種類	刀長	刀身幅	厚	茎長	茎幅	厚
14	刀子	73	14	4	10	12	6
15	刀子	66	7.5	2.5	20	5	2.5
16	刀子	70	12	4			
17	刀子	20	21	3	50	12	4
18	刀子	56	7.5	2	23	4	1
19	刀子	98	16	3.5	50	8	3

※（現存状態での計測値） 単位（mm）

形 態 特 徴	備 考
逆刺を有し、凸レンズ様の断面形。	茎下半欠損
若干のゆがみ。逆刺を有す。半月様の断面形。	柄尻部欠損
凸レンズ様の断面形。	＃
半月様の断面形。	完形品
凸レンズ様の断面形。逆刺を有す。関までの茎長が長い。	茎下半欠損
凸レンズ様の断面形。	柄尻部欠損
凸レンズ様の断面形。	＃
逆刺を有す。凸レンズ様の断面形。	茎大部分を欠損
半月形の断面形。逆刺を有す。	茎下半欠損
半月形の断面形。	柄尻部欠損
凸レンズ様の断面形。偏平。	身先端、柄尻部欠損
凸レンズ様の断面形。	茎下半欠損
凸レンズ様の断面形。	

※（現存状態での計測値） 単位（mm）

形 態 特 徴	備 考	
刀 身	茎	
三角形の断面。	刃側が薄く、背側が厚い丸味のある断面。	茎大半欠損
三角形の断面。	長方形の断面。	茎一部欠損
断面は、ふくらみのある三角形。		刀身から茎を欠損
断面は、わずかにふくらみのある三角形形状。	丸味のある長方形。	刀身大半を欠損
三角形の断面。	長方形の断面。	刀身先端、茎一部を欠損
三角形の断面。	断面は、丸味のある長方形。	

第2表 玉類計測値

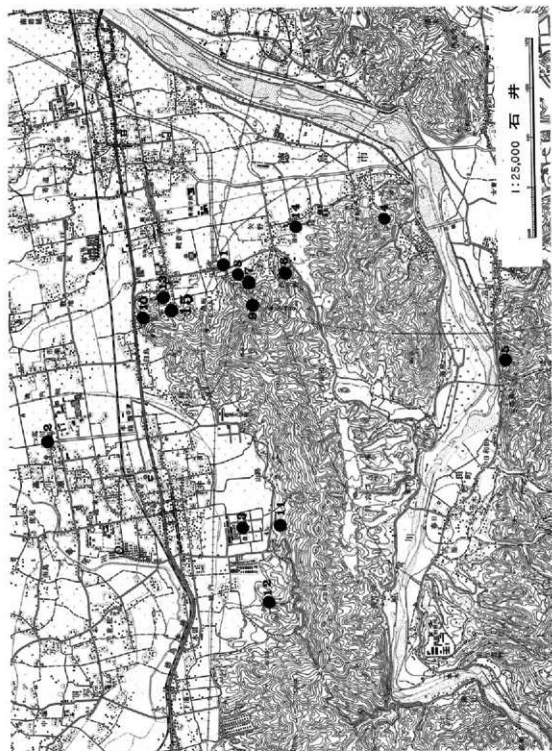
単位 cm

玉番号	種類	直径	厚長 (最大)	孔径	材質	色	備考
1	管玉	1.05	2.45	0.35~0.15	へキ玉	濃緑	
2	"	0.9	2.8	0.3~0.15	"	"	孔不整
3	"	0.9	2.35	0.38~0.12	"	"	"
4	"	0.5	2.1	0.25~0.15		青味白	表面風化
5	"	0.5	1.8	0.3~0.18		"	"
6	"	1.0	2.7	0.3~0.15	へキ玉	緑	
7	"	1.05	2.4	0.3~0.1	"	濃緑	
8	"	0.9	2.55	0.3~0.1	"	緑	孔不整
9	"	0.4	1.0	0.1		灰味緑	
10	切子玉	1.2	1.55	0.35~0.12	水晶	透明	
11	"	1.45	2.4	0.4~0.1	"	"	
12	"	1.45	2.25	0.4~0.12	"	"	
13	"	1.2	1.6	0.35~0.15	"	"	
14	"	1.1	1.4	0.35~0.12	"	"	
15	珠算玉	0.9	0.9	0.35~0.1	"	"	
16	"	1.0	0.7	0.25~0.12	"	"	
17	石玉	1.15×1.1	0.6	0.15~0.1		黒	不整形
18	白玉	0.7	0.4	0.15	アルカリ 石灰ガラス	濃灰味青	
19	"	0.65	0.5	0.2	"	"	
20	"	0.7	0.35	0.2	"	"	
21	"	0.6×0.5	0.3	0.25	"	薄灰味青	不整形
22	"	0.7	0.5	0.2	"	濃灰味青	
23	"	0.9×0.8	0.6	0.25	"	"	一部欠損
24	"	0.68×0.68	0.5	0.17	"	"	方形状
25	"	0.7×0.65	0.5	0.23		"	"
26	"	0.7×0.65	0.4	0.24		"	不整形
27	"	0.6×0.5	0.3	0.13		"	ダ円形状
28	"	0.96×0.85	0.8	0.2		"	
29	"	0.7	0.5	0.3		"	
30	"	0.7×0.6	0.65	0.2		"	方形状
31	"	0.7	0.5	0.17		"	

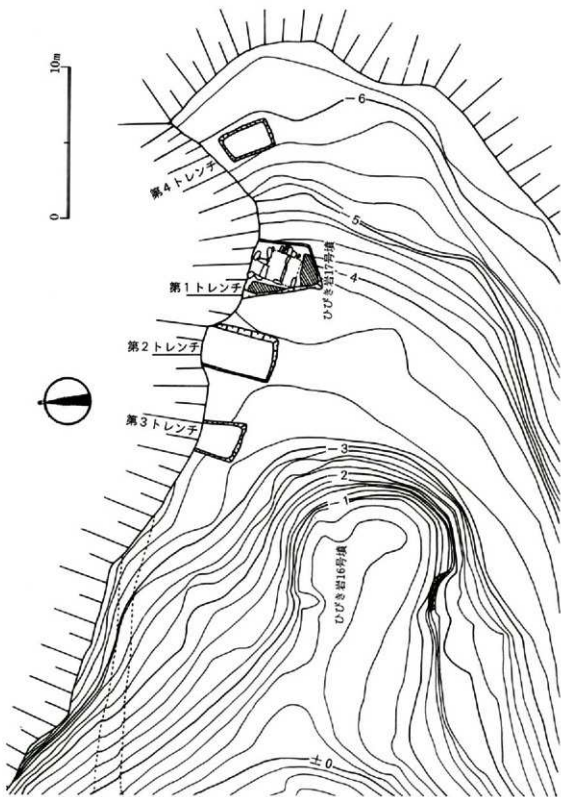
玉番号	種類	直径	厚長 (最大)	孔径	材質	色	備考
32	白玉	0.7	0.45	0.15		濃灰味青	
33	"	0.6	0.4	0.2	アルカリ 石灰ガラス	"	不整形
34	"	0.6	0.4	0.2		"	方形状
35		0.8 × 0.75	0.5	0.15		"	不整形
36		0.6 × 0.5	0.4	0.2		"	方形状
37		0.8 × 0.7	0.4	0.15		"	不整形
38		0.75	0.37	0.25		"	
39		0.6	0.5	0.1		緑味青	不整形
40		0.5	0.3	0.25		濃灰味青	
41		0.45	0.3	0.17		"	
42		0.6 × 0.45	0.55	0.2		"	ダ円形状
43	小玉	0.3	0.17	0.17		灰味青	
44		0.35	0.2	0.1		青緑	透明度良
45		0.3	0.2	0.15		青味緑	切り離し瘤
46		0.3	0.14	0.12		灰味青	
47		0.45	0.18	0.2		青	ダ円形状。透明度良
48		0.4 × 0.3	0.23	0.1		薄灰味青	
49		0.3	0.2	0.06		青味緑	一部欠損。透明度良
50		0.3	0.17	0.1		"	
51		0.4	0.2	0.1		灰味青	
52		0.35	0.25	0.1		"	
53		0.36	0.3	0.15		"	
54		0.3	0.25	0.1		濃灰味青	切り離し瘤?
55		0.25	0.2	0.08		灰味青	
56		0.4 × 0.3	0.22	0.16		緑味青	ダ円形状
57		0.3	0.2	0.1		薄灰味青	
58		0.3	0.18	0.08		"	切り離し瘤
59		0.3	0.18	0.1		灰味青	
60		0.3	0.16	0.1		薄灰味青	切り離し瘤
61		0.3	0.2	0.1		"	
62		0.4 × 0.35	0.2	0.15		灰味青	
63		0.37	0.18	0.1		"	

単位 cm

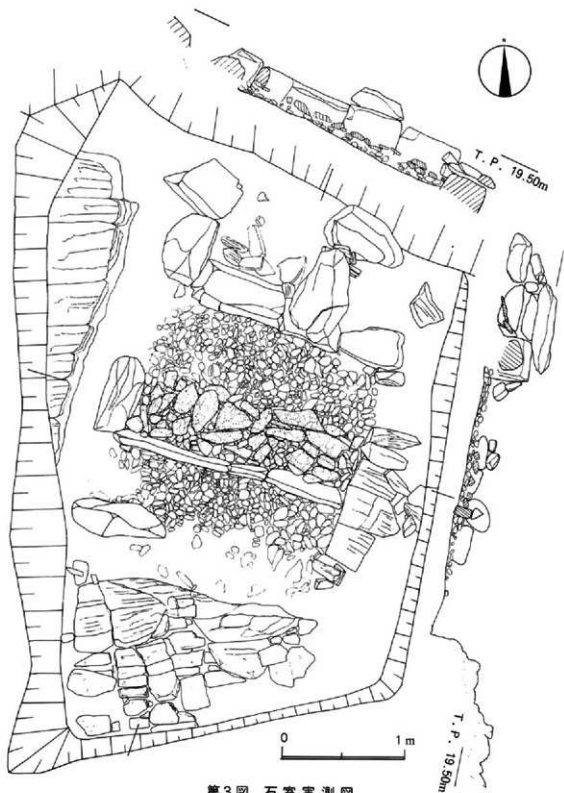
玉番号	種類	直径	厚長 (最大)	孔径	材質	色	備考
64		0.38	0.2	0.1		灰味青	
65		0.3	0.2	0.1		"	
66		0.4 × 0.3	0.18	0.12		濃灰味青	ダ円形状
67		0.3	0.25	0.1		薄灰味青	斜めに裁断?
68		0.3	0.2	0.1		灰味青	
69		0.35	0.2	0.1		"	
70		0.3	0.2	0.1		青	
71		0.3	0.12	0.2		薄灰味青	
72		0.3	0.2	0.15		緑味青	
73		0.3	0.15	0.12		薄灰味青	
74		0.3	0.15	0.1		青	
75		0.38	0.23	0.1		緑味青	透明度良
76		0.3	0.3	0.1		"	"
77		0.28	0.23	0.1		"	"
78		0.35 × 0.3	0.2	0.1		"	"
79		0.3 × 0.23	0.2	0.08		"	"
80		0.3	0.2	0.1		青味緑	"
81		0.3	0.2	0.1		"	
82		0.3	0.35	0.13		緑味青	透明度良
83		0.3	0.3	0.1		黄味緑	
84		0.35	0.15	0.1		緑味青	透明度良
85		0.35 × 0.25	0.15	0.1		"	ダ円形状。透明度良
86		0.35 × 0.25	0.14	0.1		淡緑	"
87		0.3	0.16	0.15		"	
88		0.35 × 0.28	0.15	0.15		青味緑	ダ円形状
89		0.25	0.15	0.08		淡緑	切り離し瘤



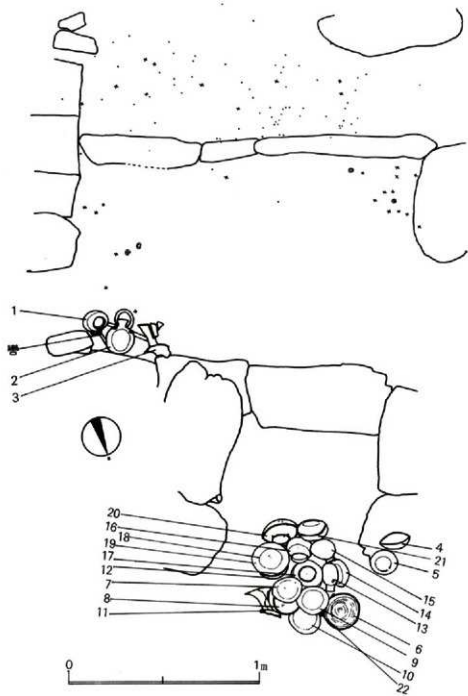
第1図 1. 矢野遺跡 2. 高川原遺跡 3. 清成遺跡 4. 源田遺跡 5. 安都真遺跡
 6. 宮谷古墳 7. 奥谷1号墳 8. 矢野の横穴 9. 奥谷2号墳 10. 尼寺5
 号墳 11. 清成古墳 12. 會我氏神社古墳 13. 国分尼寺跡 14. 国分寺跡
 15. ひびき岩17号墳



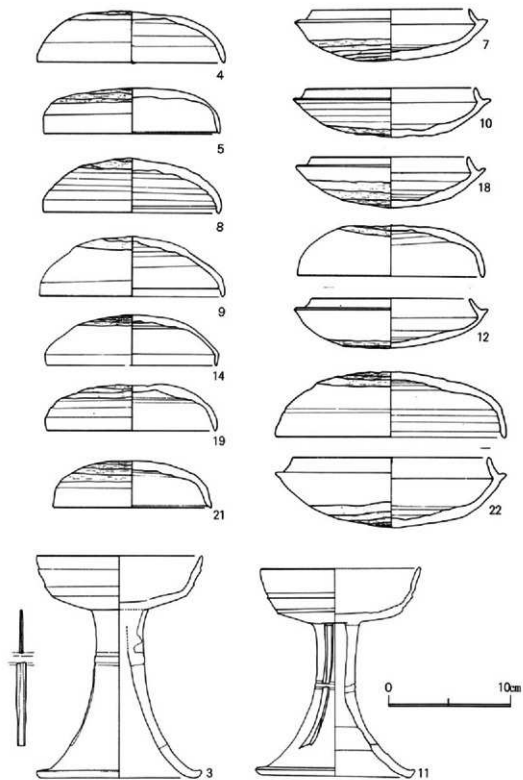
第2図 地形測量図



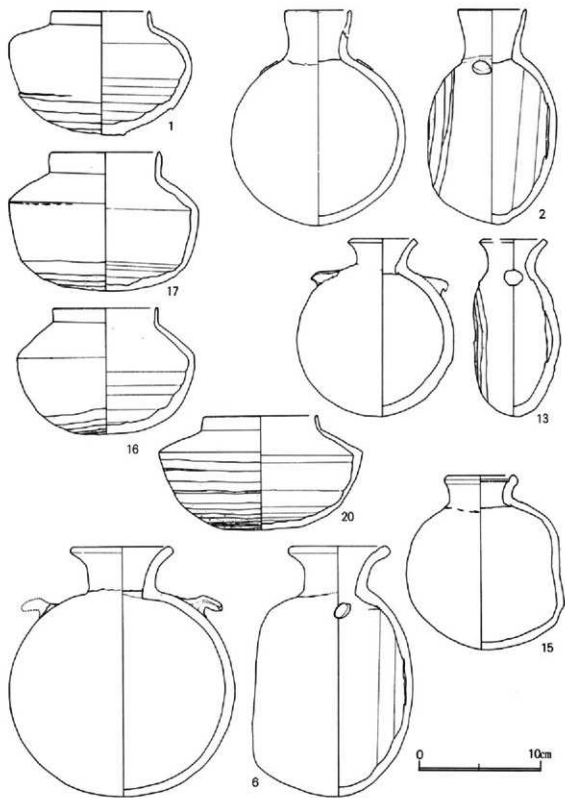
第3圖 石室実測圖



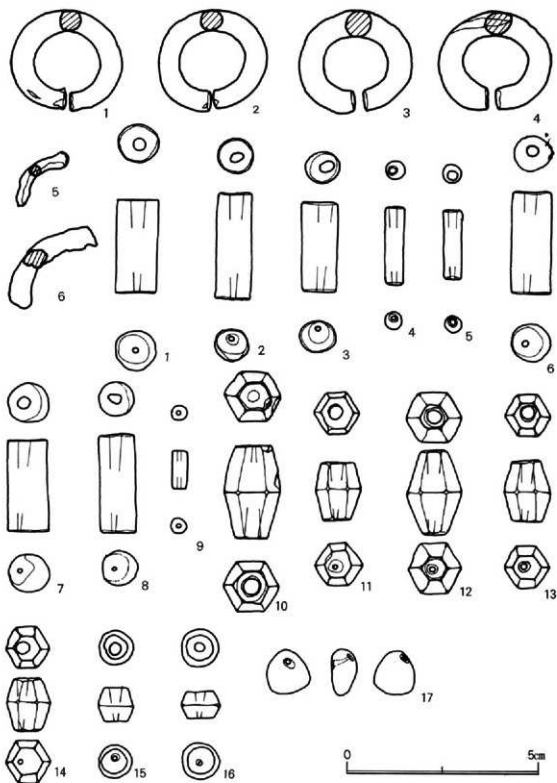
第4図 石室内遺物出土状況 ● 玉類
× 鉄製品



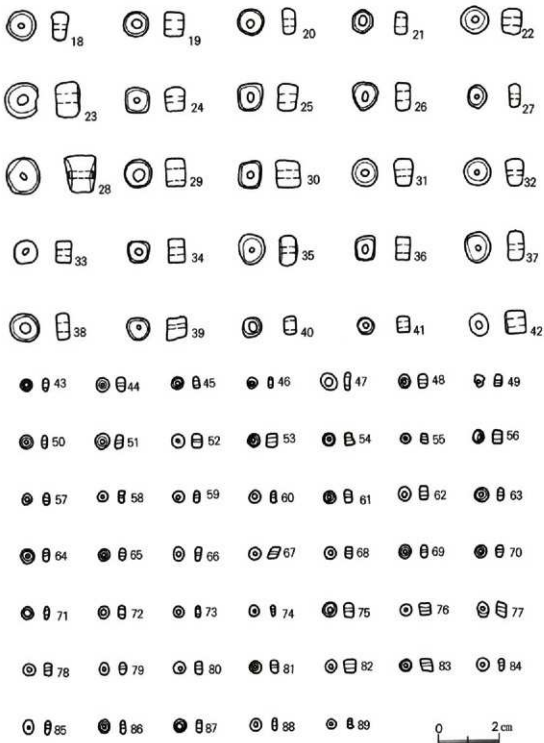
第5図 須恵器実測図 ($\frac{1}{3}$)



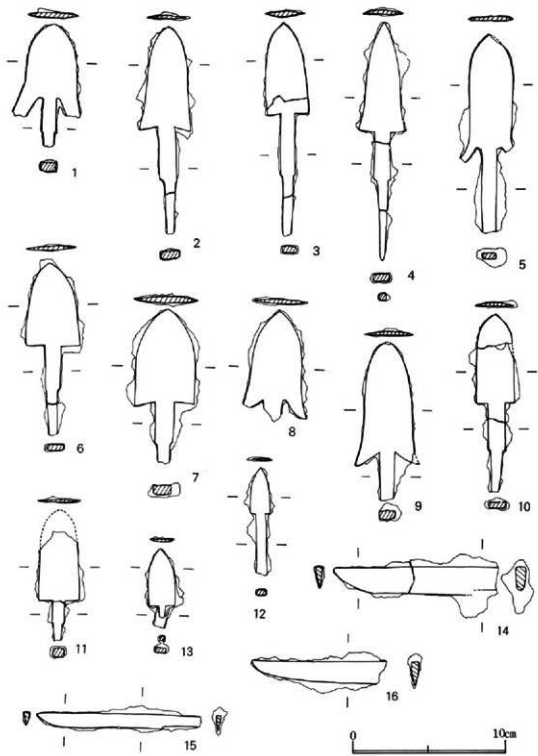
第6圖 須惠器実測圖 (1/3)



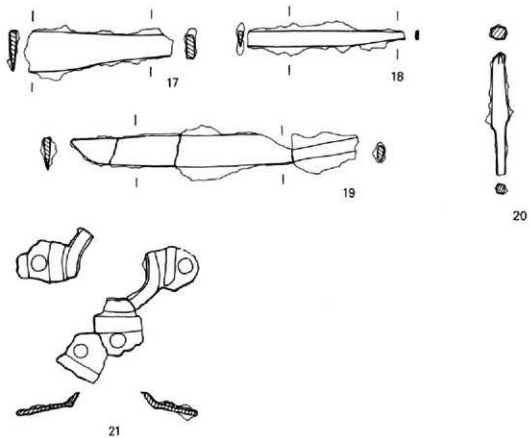
第7図 耳飾及び玉類実測図



第8圖 玉類実測図

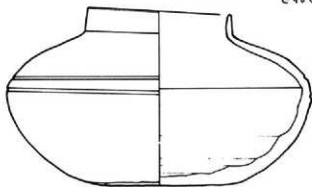


第9圖 鉄製品実測圖 (1/2)



※参考資料

ひびき岩1号墳より出土
他に杯蓋，埴，五類，直刀が同時
に出土している。柿畑として開墾されて
されており現在遺跡は完全に破壊
されている。



第10図 鉄製器実測図及び参考資料実測図 ($\frac{1}{2}$)



図版1 ひびき岩17号墳近影



図版1 側壁部の攪乱状況



図版2 第2トレンチ



図版2 間仕切り石と第1次床面の状態



图版3 盥，出土状态



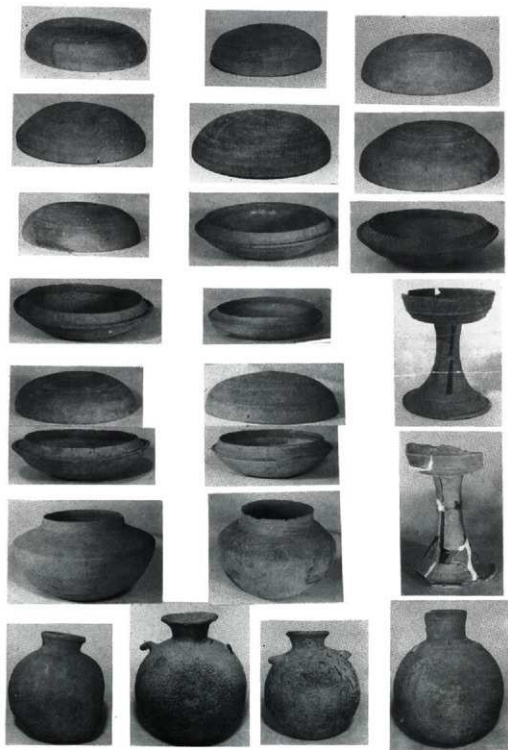
图版3 葬道部須惠器出土状态



図版4 石室全景（南より撮影）

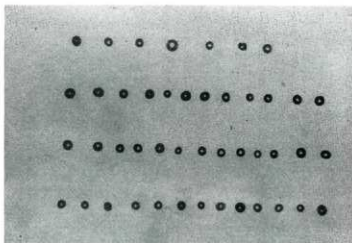


図版4 石室全景（西より撮影）

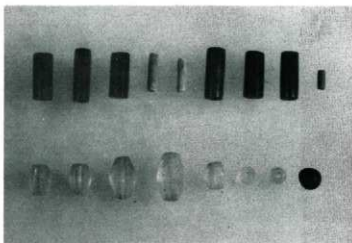


図版5 ひびき岩古墳群17号墳出土 須恵器・土師器

図版6 ガラス小玉

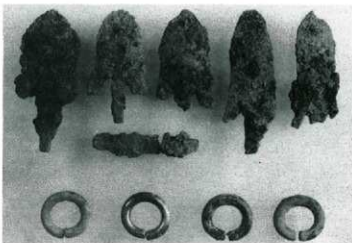


図版7 管玉



切子玉、算盤玉、石玉

図版8 鉄 鍬
刀子
耳環



しょう
庄 遺 跡

徳島西警察署地区発掘調査

目 次

1. 遺跡周辺の歴史的環境	56
2. 調査の経緯と経過	56
3. 調査概要	56
4. 層 序	57
5. 遺 構	57
6. 出土遺物	59
7. 後 記	60
図1. 庄遺跡周辺の遺跡	61
図2. 土 層 図	62
図3. 第1遺構面遺構実測図	63
図4. SB-13実測図	64
図5. 第2遺構面遺構実測図	65
図6. 第3遺構面遺構実測図	66
図7. 土器実測図	67
PL1 調査地近景	68
PL2 SZ-11	68
PL3 SD-11	69
PL4 SD-12	69
PL5 SB-12	70
PL6 SB-11	70
PL7 T-01第2遺構面柱穴群	71
PL8 SB-13	71

S X-13 (T-02)

S X-11, S X-12の中間にあるもので、畦畔とも考えられる。幅30cm前後で、東端で広がり、S X-14の肩に至る。ここに杭跡S Z-11を検出した。

S X-14 (T-02)

東西の幅約16m、深さ約20cmで、水田址とも考えられる。土師器・須恵器が出土した。

S Z-11, S Z-12 (T-02) (P L 2)

直径5cm前後、深さ約30cmの杭穴と考えられる柱穴を28ヶ所検出した。S Z-11は、S X-13の上面、S Z-12は、S X-14の上面から切り込んでいる。その配列には規則性はみられない。

S X-15 (T-02)

一部を検出したため、その性格規模は不明である。炭化物・焼土を含む。土師器が出土した。

S X-16 (T-02)

一部を検出したため、その性格、規模は不明である。遺物はみられない。

S X-17 (T-03)

東西の幅約3m、深さ約10cmを測る。水田址とも考えられる。土師器・須恵器が出土した。

S X-18 (T-03)

東西の幅12m以上、深さ約10cmを測る。水田址とも考えられる。土師器・須恵器が出土した。

S X-19 (T-03)

上の幅約20cm、底の幅50cmの断面台形を呈し、南北に伸びるS X-17, S X-18の間の畦畔とも考えられる。

(2) 第2遺構面(第5図)

柱 穴 群

S P-21~26 (T-01) (P L 7)

性格・規模は不明である。土師器・須恵器が出土している。

S P-27, 28 (T-02)

性格・規模は不明である。土師器が出土している。

不明遺構

S X-21 (T-02)

幅約3m、深さ約20cmを測る。溝あるいは水田址とも考えられる。土師器が出土している。

(3) 第3遺構面(第6図)

土 壇

S K-31 (T-03)

一部を検出したため、その性格・規模は不明である。弥生式土器・石鏡が出土した。

S D-31 (T-03)

幅約3.5m、深さ約50cmを測り、断面梯形を呈す。弥生式土器が出土した。

6. 出土遺物

周辺の分布調査において、弥生時代から、近・現代に至る遺物を表採しており、当該地での弥生時代以降の遺物が期されていた。調査の結果、弥生から奈良に至るコンテナ40ケースもの遺物の出土をみた。出土遺物は未整理であり、ここではその一部を掲載するにとどめたい。

弥生式土器

T-03及び立会調査でみられた。

SK-31出土の甕は口径13.2cmを測る。頸部は外上方に大きく伸び、口縁端は上方に肥厚する。口縁上部に振回線が施され、全体にヨコナデ調整されている(図7-6)。SD-31出土の甕は底径4.7cmを測る。胴部は底部から大きく外上方に伸びる。外面に不整方向への細かいハケ目調整、内面にヘラ削りが見られる。胎土中に金雲母を多量に含む(図7-7)。

土 師 器

全ての調査地で多量に出土した。

SB-11出土の坏は口径14cmを測る。口縁端をつまみ出し、ヨコナデ調整が見られる。焼成は堅緻である(図7-1)。

SB-13(SP-14)出土の坏は口径11.8cmを測る。特徴は前者と同様である(図7-2)。

SX-14出土の坏は口径11cmを測る。貼り付け高台を有し、体部は急角度に立ち上がる。口縁端はつまみ出し。焼成は堅緻である(図7-3)。

SP-23出土の坏は口径15.6cmを測る。口縁端をつまみ出し、焼成は堅緻である。(図7-5)。

土師質土器

T-03以外の調査地で出土した。有溝土鍾が2点、管状土鍾が20点である。

立会調査地から出土した有溝土鍾は全長5.1cm、幅2.8cm、溝の上端1.1cmを測る。重さは32gであり、比較的軽い。焼成は堅緻である(図7-8)。

SX-14から出土した管状土鍾は全長8.6cm、幅4.2cm、管の直径1.1cmを測る。重さは160gであり、焼成は堅緻である(図7-9)。

須 恵 器

全ての調査地から多量に出土した。

SB-12から出土した甕は口径50cmを測る。頸部は大きく張り出した肩部から外上方に急に立ち上がり、口縁は肥厚する。頸上部に6条の櫛描波状文が3列、頸・胸内面には青海波文が施され、肩部には叩目が見られる(図7-10)。

緑 釉 陶 器

立会調査地から2点出土した。削り出し高台を有する甕は底径6.6cmを測る。高台は断面梯形を呈し、体部は内わん気味に外上方に緩やかに広がる。外底面及び高台の一部に素地を残す(図7-4)。

磁 石

SB-12から2点、立会調査地から1点出土した。

7. 後 記

今回の調査は限られた面積であったため、十分な成果を挙げられなかった。しかし、遺構を検出したことにより、庄遺跡の範囲及びその性格の把握の足がかりになったと考える。

層序及び出土遺物から、第1遺構面は奈良時代から平安時代、第2遺構面は古墳時代後期、第3遺構面は弥生時代後期に比定される。

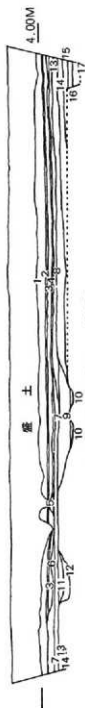
尚、十分な整理、検討を経た報告ではないので、相互の詳細な比較検討は正式報告書によりたい。

(河野雄次)



第1図 庄遺跡周辺の遺跡

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1. 庄遺跡・徳島西警察署地点 | 7. 節句山2号墳 |
| 2. 庄遺跡・蔵本運動公園地点 | 8. 八人塚 |
| 3. 庄遺跡 | 9. うばがふところ古墳 |
| 4. 南佐古浄水場遺跡 | 10. 穴不動古墳 |
| 5. 名東遺跡 | 11. 野神原古墳 |
| 6. 節句山1号墳 | 12. 組合式箱式石棺 |



1. T-03 北セクション土層図



2. T-02 南セクション土層図 (1)



4. T-02 西セクション土層図



T-01凡例

1. 黄灰色粘質土 (田耕作土)
2. 草褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 暗青色粘質土
6. 暗灰青色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 暗灰青色粘質土 (S X-16)
9. にぶい暗灰褐色粘質土 (S X-12)
10. 明灰黄色粘質土に灰青色粘質土を
ブロック状に含む (S X-11)
11. 暗灰青色粘質土 (S X-21)
12. 暗灰褐色粘質土 (S X-22)
13. 暗灰黄褐色粘質土 (S X-23)

T-02凡例

1. にぶい褐色土 (田耕作土)
2. 明灰青色粘質土
3. 暗灰青色粘質土 (S X-14)
4. 暗褐色粘質土
5. 暗青色粘質土
6. 暗灰青色粘質土 (S X-15)
7. 暗褐色粘質土
8. 暗灰青色粘質土 (S X-16)
9. にぶい暗灰褐色粘質土 (S X-12)
10. 明灰黄色粘質土に灰青色粘質土を
ブロック状に含む (S X-11)
11. 暗灰青色粘質土 (S X-21)
12. 暗灰褐色粘質土 (S X-22)
13. 暗灰黄褐色粘質土 (S X-23)

T-03凡例

1. にぶい褐色土 (田耕作土)
2. にぶい灰白色粘質土
3. にぶい灰青色粘質土 (S X-17, 18)
4. にぶい灰褐色粘質土
5. にぶい灰黄褐色粘質土
6. 明灰褐色粘質土
7. 黄褐色粘質土
8. 灰褐色粘質土
9. 灰黄褐色粘質土 (S D-31)
10. にぶい灰褐色粘質土
11. 明褐色粘質土 (S K-31)
12. 暗黄褐色粘質土
13. にぶい灰黄褐色粘質土
14. にぶい黄褐色粘質土
15. 明灰褐色粘質土
16. にぶい黄褐色粘質土
17. 明灰褐色粘質土



图3 第1 次剖面构造观测图

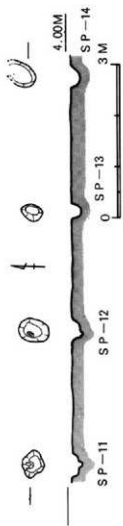


图4 SB-13 实测图

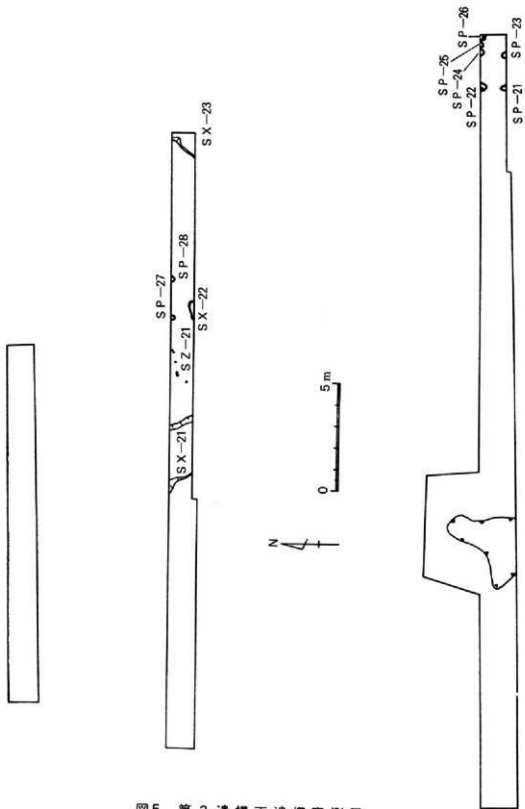


图5 第2遺構面遺構測測圖

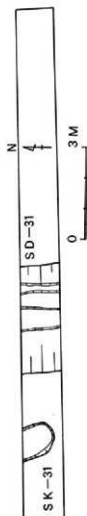


圖6 第3遺構面遺構實測圖 (T-03)

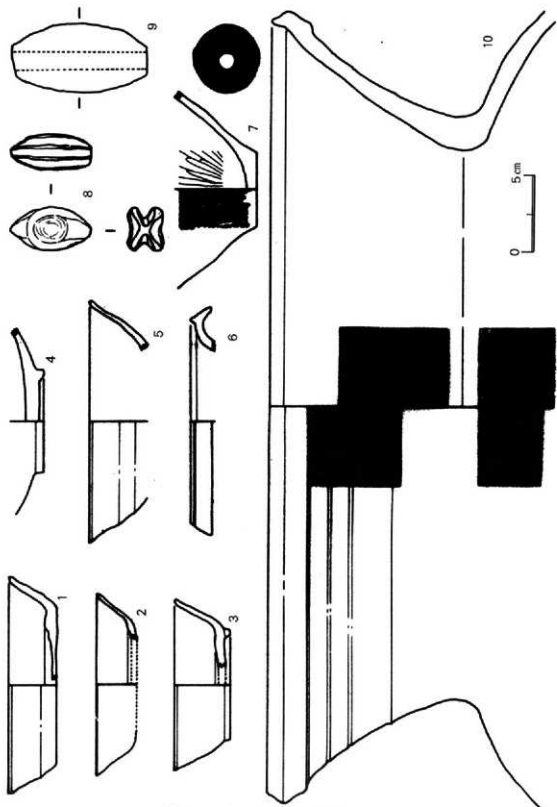
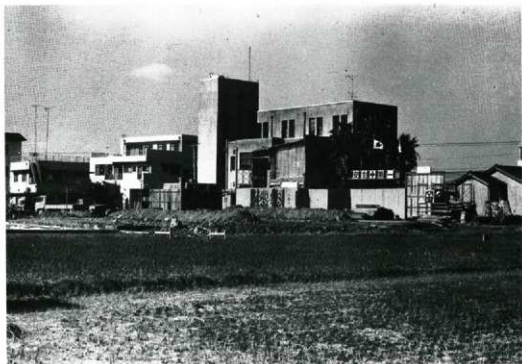


图7 土器实测图



PL1 調査地近景 (南東より)



PL2 SZ-11 (南より)



PL 3 SD-11 (西より)



PL 4 SD-12 (西より)



PL 6 SB-11 (南東より)



PL 5 SB-12 (西より)



PL 7 T-01 第2 遺構面柱穴群



PL 8 SB-13

徳島県文化財調査概報
昭和54年度
(1980)

発行年月日 昭和56年3月31日
編集 徳島県教育委員会文化課
発行 徳島県教育委員会
印刷 グランド印刷株式会社
発行部数 8448

正 誤 表

ページ	行	誤	正
3	23, 30		
4	4, 18, 25		
5	7		
23	12	豎	豎
24	36		
25	18, 33, 37		
32	32, 33		
4	13	磨	磨
8	4		
9	21		
23	13	5	6

67 10 圖

